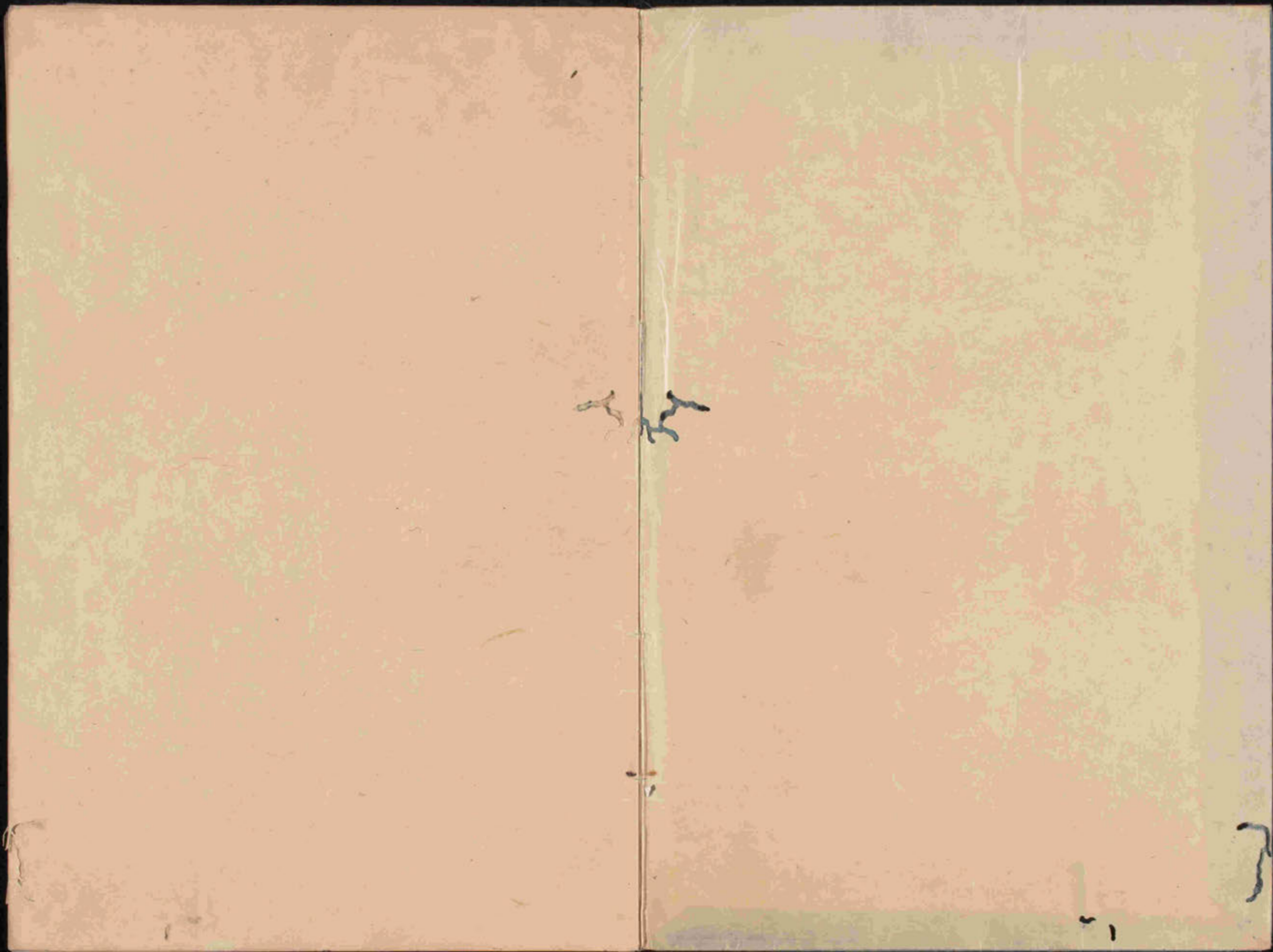


續千載和歌集上



R
R

1840

1840

1840

1840

1840

1840

1840

1840

1840

續千載和詩集卷第一

春哥上

春ぬけのしらをよみゆける

前中納言山定家

みら日のあけをさしよつとに海の浪もくまひてきりぎりす

よかえの年百三言もあけし時

入道前左大臣家

おの田代は代のりやたぬに春は雲はとてそのくさるゆ

初^{はつ}の春の心をよきとけうける

は身片製

よ河のあそびけり春は凡よ年くらつら氷のたけ

弘長元年後張我作よ百三言もあけし時

前大納言為家

まゆり春はさよをさとう波や吹くとも賀のうら

常盤井入道前左大臣家

朝日さすれおのくたえさるる春のまてり

歌しりあ 古中納言片製

こぼりさすれ朝日のねあ糸にうらな春のまてり

順徳院片製

わくま乃年の初ゆきかけり春をさして春さすり

鶯のさくらさくらをきいて

郁告門は女彦

鶯のさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

歌

九河の船恒

鶯のさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

三條右大臣家の屏風よ

純貫

鶯のさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

よ又百書うかよ

藤中納言定家

山室の鶯さくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

鶯のさくらさくら

鶯のさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

後はおもひさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

にさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

龜山院の歌

谷のさくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

かみ

今と肝歌

さくらさくらをきいてさくらさくらをきいて

百書うかよ

は身止歌

家々〜〜〜う列ある梅花さけの人の賞ま〜
建保四年の裏百番言合に

八条院の末

賞乃ゆりせに流〜〜して梅さ〜若さ〜とを

歌〜〜人 源道衡

け〜みれい春〜ゆけ〜つ、若の地〜梅は賞ま〜

長春即時け屏凡よ

みけ福

梅〜にふ〜賞の多きけ〜ゆ〜い〜ふ〜雪は降〜

ふふ百番言合よ 惟明親と

ゆり〜を〜都の春よは〜〜花よふれ〜谷ま〜賞

歌〜〜人 道因法師

梅〜に降〜白雪を〜〜ゆ〜わ〜む〜のあは〜

正治二年後鳥羽院よ百言合（そとら）けり付

後奈良格抄及前を及人良

春日野の草ゆ〜に〜雪は〜〜つ〜雪のあ

正治二年後堀と教院よ百言合けり付

春雪 前入納言為成

ゆら〜の〜ゆ〜春日のわ〜紙子ゆ〜雪は〜

弘安元年龜山院よ百言合けり付

入道藤太政大臣

歳并しつとくもゆるるるる香あつと凡そしく雪の降し

春雪をよるとぬるけし

院中製

いりしきつる花笑つとまきこもみす雪の降つ

伏見院中製

春しほにゆきまき雪のゆり雪は花うさしむらさきの

二月餘寒こいつらんを

後二条院中製

みの野はれぬらふとまきこもみす雪の降し

寛治二年人々くは百も雪うけけりかきく

春雪をよるとぬるけし

後嵯峨院中製

春のこに泣く女ゆれ朝日乳まきとまきこもみす雪

位吉祐は^まゆきとぬるけり百も雪の中は^まぬる

前久納言為家

トもまきと先うくくは白雪のあは雪まのまあるにじや

寛治元年女卿入内屏風は

常盤井入道藤太政大臣

白妙の袖にわつるを摘とる雪両の草ゆきをみらる

雪中若菜こいし草をよりと新うけら

は身御製

袖のくまがにゆる雪をよみひつじにわねをたぬきいじ

は身百も言ちりける時

入道前を改人夫

みるじい袖をゆきけけわつらふゆる野の末に雪まら

は身百も言ちりける時

を改人夫

いづくも野へをづつと白雪の清らうこよりあをさうじ

謙佐の家の屏にきき野よりつらふにけり所

淡けら

大中尼徳宣朝臣

わづらひる者くらしにまの者りけ野へよるなまじ

若菜をよら

清原原兼文

そとあつらひる者の野よりつらふにけり所

は身百も言ちりける時

相摸

春のし朝ね糸の八重つとみりそらうひてそをゆきけ

ねとあつらひるを 順徳院御製

みらこを霞うめてらるる砂のねは片のそしりり

内院抄及家百その言も霞

後醍醐天皇の
後深田信實朝臣

高砂乃女へのねね朝とこめれむと女代は若くは女
亭懸井入道兼左大臣

昔藤原のありはるかにしるやこの同のしるやうまに

昔の言の中にも
藤原正道性

らるにゆき霞はほろけしぬ雪をよみす中ねに

寛治百三言ちりけり
藤原百三言

藤原納言為氏

女中の田とこの朝とこめらるる言とこはあ

百三言ちりけり
藤原納言為世

娘と霞^子入けり女中一人吉次めく屋の昔のわを

正治二年百三言ちりけり

後京極権左大臣

のしるや昔の光にねねやとこのわの神や

柳と
藤原信實朝臣

昔のまじりしるにふとふさぐ娘のうしろはりの青柳の

藤原納言定家

浅井しるやとみとみと青柳の枝と

雪中梅こしるをよりととけり

今上御製

消アとて梅の雪やむらりに埋れそぬ梅のうすま

百三十一句 後京為山朝長

けしうへは降りしうみろ梅の雪の花よあまきこる春は淡雪

春の句の中よ 九条左大臣女

吹留よふよその梅は梅のついでにわの袖より春の夕の縁

二品は親と覚助

まをこめくこいれアすらし我宿の梅のま枝よ春風うち

變治百三十一句 けしうにがくよ梅董凡

後張と我比古製

ししめふみをとみとく梅の花よはかしく我宿よ春風

建也二年詩句を合我にける句 江と春ら

蘇久納言為家

ちよふははるきこよわと梅の雪は雪にみらくる春の梅凡

名所百三十一句 けしう

蘇中納言為家

梅のや先うにらしききよま玉鳩川の屯のうみ

歌一十 よみ人

つゝ若乃梅さうつらうき若ういよまふいふあわが

我宿よらうらよとける梅の花ちるくぬぬみ人し

は百三十一句 けしう

大翁了隆傳

ゆきこより一恨一春の居さそゆるの人も同じし

はち三年の裏に百三言もりけり時帰居

麻久納言良教

別けしち一花乃娘の名おえ思ひしり春の居有

歌一十

津守國助

ぬるわくくこをこのしは霞のよりに思ひやふれ

百三言もり時

麻久納言為世

甲くは電又霞の周もつふ言はもる居をより

ゆきのを

永福門地

ゆき乃道よりゆふふ言はつとし雪井に流る居り

中宮

より野山幸えいよしてゆくのぼりては花の白を

百三言もり時

入道麻久政大長

様ちららゆくるもゆきより花るるに人むくこと

歌一十

中教か宗三親王

香しゆら花を越はれ色こみくよりいど秋暮は居り

寛平中村右大臣詩合評

北友則

春面乃まありこもみくは野人の緑をいえ逢し

よま百番うたをよ

後京極格政前々女をよ

野とふもあうみとつよに逢てふろと霞よりあうこのあき

よま元百言うせり付花

贈辰之屋考子

今よりいぬかろし花のおもひをにま田のよあまの白雪

花をいづらんを

前用白を及人た

まに種よりやうと計にいづよと花よりまの香うた

津也園助

よあよりとまあれくうよあもしと逢ける種も花よりあ

源兼氏朝夫

このあにゆいあむら花ぬにみうりりこのあうた

前人納言為家

あねより花くらよとれもうれし女ゆらまは

よ治百言うせりけり付

式子内親王

花をいぬかろしをみゆら明あめまの格にうりら白雪

歌

和泉式部

あねよりあうたせまは中くよ極まこわし我よきりん

鳥羽他止生家

降あのあよりあうりよあ若ら我がむうのあひあ

柿本丸

とよまきくらの櫛みよゆいきくしむりむらうの

くま百番奇名に 蘇大儒正慈鑑

櫛花まきみねさきしきりのしつひわらきまほも

禁中感花こいつらんを

伏見院書製

こくくむとらけろとちり百おぬちま人の今くすしお

變治百さきりけり付し花

し階入道丸人

とよまきくらの櫛むらうけしむねそり

百さきり付 持中納言雄

ま娘乃初むら先の袖もまわらぬく笑し櫛のふ

歌し子 は下宮書

た乃ましむらうのむらうのむらうのむらうの

百さきり付 丸人

し櫛のふはけらるに成りまをりまのふはけらるまを

はま百さきり付

蘇大儒雅有

し櫛雪のむらうの考凡はま津うけらるむらうす

西園寺乃八を櫛をみくよとけり

常盤井入道前を及んた

しゆりつねとにいつる白も乃ハ幸にいつるむ梅ふ
正治百三言けり付

直煇門院丹後

よ野山震れし日わらや幸れこころの梅りるは
久母六年崇徳院は百三言けり付むの

三

皇々后文太史後成

山梅笑よりさふあくく人の心や幸のまらそ
家も花又すきの言よみ付けり付

後京極持政前を及んた

ゆくう花にいつるむとにきと新の奥にみくく白も

龜山院はよおゆりけり付所くのもみゆく

一枝ゆりくくむりて奏し付け。

後一条入道前用白た久長

毛くちとねら花をゆりむのけうの花をみらり那

片粉

龜山院片粉

こけりとねら花乃梅花くふ久きゆりこころみ

よ元百三言けり付花

前入納言為世

けりさく乃そ梅よわらむれく越しけり
幸のむらりり

續千載和歌集卷第二

春哥下

夜泊百三言りけりかぐと惜花

後漢義隆の歌

かくりりおし思ふかを言わしてむみくゆらんさうぢう

西園寺入道藤原良家之三言り花下日記

しつらんを

藤原納言考家

るうしとも思ふ言わたり氣花よりけりふ春の心を

歌~~~~か

源重之女

ま乃日花よ人のわくをかく物思ふ人こみく思ふ心

夏系清浦朝衣

思ひおのゝやひ〜〜〜

上流と奇合〜〜〜

後は性ち入る蘇用白衣

思月とむらをう〜〜〜

花乃奇〜〜〜

順徳院抄

かの〜〜〜

ちのつ〜〜〜

山人の花〜〜〜

鎌倉右人末

みの〜〜〜

山花〜〜〜

より野山〜〜〜

前大納言考氏

花も〜〜〜

百〜〜〜

白書の〜〜〜

白三信考實

大至り〜〜〜

歌——と 万葉門歌

咲にふつとぬしの孝乃櫻也 ぬれをくすむるうらひに

百三言あり時 権大納言経继

白中いぬらとが^まくくより 野にむの奥より切らよのが

歌——と 平貞時朝臣

みの野やあへむもよ入月の光をのこすうらひに

前大納言俊光

つとみけりて花のまねとわくそきて夕かよみゆら山櫻に

百三言あり時 日大長

花乃まはかり成書つとて初とよみのへ如鏡のまきう国ゆ

歌——と 邦有親己

かたしとてよも同の霞をまきしよそめしやとむの夜

百三言あり時 花

入道荒木政大長

山櫻花の外なるるよむらひと行まてふ霞なるをて

百三言あり時 二品法親王定朝

咲にくむらうれとこもやわく霞はゆらと句は

花の言あり時 津中團助

ほらよ乃けこの櫻咲あつと枝もよれと花に初みれ

徳治二年三月言あり

力の考をいじりまゝ九筆のみし梅よそまのみ
南殿の梅を午府よりうへ付けの付大由志
花のぬねくけけい

花を大將考教

いぢりの書お梅ゆめしわ我文考しわ成りし
百言より時 前用白を改大志

百言より梅のいぢりまゝ梅の白いぢりし
故郷花を 是は考教

あつらひじりし我す笑むぬぬ考を思ひし

今といゆこみぬまこまゆし時清きし我海又

ここの中花 花中納言考藤

うづら志願の志花わ我ゆを世のむに惜まぬ
又やここのとぬけり

後考時流考教

花ゆよ志願わゆるはふし我いじりしをけり春はう吹
叔父親しゆゆを 入道二親と性助
位推しわの志をまてみ我むりゆこ昔わわを我

花考の中に 源兼成朝志

くまゆ昔の考のおとけよ又さくら花の

天徳四年の裏秋言ふは極

中務

年一にきじつちのみら極花霞と今いなるくう
振河原中官のち方あくるくまづら
て花を折るにりては前にもくくして言よ
西を招けるよさう源後頼朝也

吹凡をりてひてのともさすもむみね年お若しなけは
歌うた平宣時朝也

いきこい今年もみに秋の極むよおこい余ちゆり
前入納言為家

花とみくくさじよのやみよのいさごい世おこみ
は母百秋言ちゆける付

女嘉門院曰條

いりこ斗人をゆきまゝ一宿くもこに秋ねむし思ひまゝと
花言中よ 藻壁門院女也

りくまゝに凡もあひの極るるみら我をく同人とあし
よみ人う

を乃に花ねちりの同人のあくらねをいりねま
白川の花みゆて吹ひの日よみゆける

前入納言為家

何にまよふといふ極花のしけさ春のまをうらむ

蘇大納言為氏

凡のまにちちる有こと極いづくをむのましをえ

寛治八年八月高陽院言今日極

信中納言通俊

春凡の吹こもちる極花もまのちちるを我もるに

むし

むし所が親

春にののこくはいつも人よもみで春やうん

太宰権帥為経

ふらりりしりいゆふと極ちれはまをりるまの白を

赤元百三言も一付花

蘇持政丸人

いりりよえに花のこころまはまの極花をまのり

落花乃んをまのりと極けり

今と御親

わさちりりこころいりる花よかにいれちちるを凡とまのり

花の言の中

に和さ二品は親と守覚

花にみちりりり斗の白をまもる極にいつく春のしり

正治二年九月十日言今日落花

蘇中納言守家

つゞきこの流にみく櫛花ちりのゆらみの孝志と凡
小野皇々后宮にゆきくけるに道をりける花に
ちりていこにの並ちりけけの淡ゆける

并乳母

林にいちりめわぶささくわれを結るや凡とに
天徳四年内裏う合る櫛

中納言朝忠

わさちりていこにの櫛花をいけけ
歌——人 貫ら

ちりていこにの櫛花をいけけ

よみ人——人

ちりていこにの櫛花をいけけ
建保四年後鳥羽院み百言うまける

参議雅行

者凡花ちりていこにの櫛花をいけけ
名取言淡ゆける中に

津子園助

さくむちりていこにの櫛花をいけけ

情落花こいけを 九条左大臣

友花乃わねま多成りていこにの櫛花

百三十一

入道兼左大臣

列くみろ起来乃花よあつとさつづの泪はあつとさつづ

雨後落花を

兼用白を叙大夫

面晴る朝の花ははらさや春ともあまらさちろ梅の

花うの中は

中務平恒明親

まろつと凡そのこころ恨に花の中は花はちりしこ思入を

後は姓も入道兼用白家言今日花下明月

後直法師

花より月をうこもい惜つこ入をいそあをこよら

修理大夫原孝人くも花やううよもをよは

花のけり

後頼朝

あつとこいしられうよけさ梅花ちろ成みうまの心ゆい

歌

大納言経信

春風の吹ゆるこころもあまら梅も咲くしうみあ

兼用大夫

吉野河花のよつとみをさけまおのの梅今やちろ

ふりぬ花のちろさみ

信三位成久

ちろ花乃浪を老根に吹くしうはよう梅さうし何き水

西園寺のむねさしに申けり

常盤井入道兼左大臣

思ひつらんの花と池水よりにららるるのまじりて
如

西園寺入道兼左大臣

ふたはあけしとまろし梅をいぬにけりよのちりて

花鏡抄にらるるを 源兼康朝

わすれいたるふらじあそむるよにけり梅の枝を

如 源邦朝

吹凡とくみとくし梅のちりて花の名とあし

平貞朝

あけくみら我もあそむる梅のちりて花のちりて

平弁時

きのふや梅の花のちりて朝けの凡もあそむる白雪

藤原信正實朝

わすれや梅乃春凡よりて梅のちりて

如と落花を後ら 藤原春宗

ちりるところの梅のちりて花の痕もい春凡より

如 藤原春宗

藤原春宗

こころもちりあそむる野山わしの花はかゝる白雪

藤原春宗

凡ゆる雪の枝乃とくく〜花のこころよ雪こゆり雪
又元二年の裏十と前に落む似雪こいふ事を

兼大納言為成

雪このこゆりこゆりこれこく〜ういふ花の春のよゆ

硯の多こく櫛を入く入道前を改人長にけりてさ

れけり

伏見院出書

おほよふ面敷と〜こいれにけり花の雪のよ〜雪

おほよ

入道前を改人長

こころ〜とみろ〜いあ〜るを造まとあ〜るをむの白雪

正治百とすもけりけり

後京極移改前を改人長

〜と又こ〜る雪あ〜るゆり〜の花い雪〜や今そち〜る

〜と

後京極移改前を改人長

〜と野〜く〜る雪こ〜み〜るよ有明〜るを花〜り〜る

兼大納言為家〜に百と歌歌淡淡けり

後二位家隆

〜と〜る雪の枝乃とく〜る花のこころよ雪こゆり雪

承暦二年四月の裏十と前に落む似雪こいふ事を

兼大納言為成

〜と〜る雪の枝乃とく〜る花のこころよ雪こゆり雪

月花門院(まげら) 常盤井入道兼左大臣

山里の向くく人の泣きあしちのけし花の香こみれこも

元仁二年三月内裏にくんくこころ言淡ゆけら

付と路落もむと 藤原為道朝臣

ちし思用にいふけりる落こも泣しをこもむとむと

寄花院こころをこもむとむとけら

伏見院と製

うしろふもんにけりる乃花あふこころわあしむけり

花の言中つらに 藤原門院女御

あなし凡よんのるこ世え春咲むをちしとら

西園寺入道兼左大臣

袖のうへわのねえ香いさめをけ言あし春の花あふこころ

落魚田花不見人こころを

大江の里

泣きこして志しげと春に咲花乃ちりこころ思ひかへる

謙徳ら家の言をよみ人

宮乃好凡よむやちりあし春言このおまも鳴る

かこのまこ申ふし付あしとけりけら

今上御製

まのや春の涙と乃花をこころやすみのふれあしこの月

百三奇あり付

前大納言為世

むて、とりちりて、くもれ、春のよの月、いにしへの、あうめ、

二品は親王光勅

かすじよの月、より更よ、思つる、とらふ、神の春の、じり、

春月と

平村村朝也

春のよの、夜に、くもる、えり、秋の、泪に、くもる、月、みら、

後復草院女持也

くもる、しづ、お、わ、く、久、望、乃、え、よ、か、め、ら、春、の、よ、の、月、

よみ人

に、くもる、恨、さ、く、ま、く、春、の、く、の、月、を、く、く、く、く、く、く、く、く、

はとも元年百三奇あり付りける付印

前大納言為世

み、く、わ、く、か、み、く、ま、ぬ、く、を、の、ま、え、に、あ、や、く、春、の、よ、の、月、

春陽月、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

月影を、あ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

延喜止付止屏風、み、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

寶暦百三奇あり付りける付雜款也

前大納言為世

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

ちん門院小宰相

言やして人としまゝわ羅日い笑ふ頃のむねもしくし
月をよるとほりけり

法皇御製

梅花あやし後いふゆゑ乃さける羅にのとは者りふ
赤気百三十九あり付款也

権中納言云雄

言とけり者のあつたをりもにさやいひのよ受もむ
去乃今の中に 権信公覚因

行者をけりいし世もあつらんよりにけり山ゆゑのむ

後鳥羽院御製

口向あつ乃花をいふしうもあつてわのあつた
弘安元年百三十九ありけり付

藤人納言考成

け者いふしとほりいふ頃の花よりあつたわのあつた
後埋ねこしつらんをよるとほりけり

法皇御製

ねしあつたすくちり埋れてしつらんわのあつた
歌しつらん ちを人将原實

幾者もむのころをねしよえくちりわのあつた

証しつす 右人た

司しつ房が社をときてうめやたき考この月とあま
百言言せり付 用白内人た

初考と初本のよししにまほれ座のさくらのちりよのまの
書者のんを 麻槍儒正言雅

あひるもをさうひく切本のくくね浪と考う言わ
びつし 橙大納言兼季

吹ゆつす瓦のうよ書者くくかきこよじとんむの白浪
書者のんを 西園寺入道兼季

ちりつろも乃りをみしのおわくともまはるにけり
んくにもやさうやけりにがてよ

いふつし考くれもつとたひまのうけを
後鳥羽院御製

おしし詠きよた

續千載和詩集卷第三

夏詩

寶治百首言ちりける付首夏

衣笠の衣

考以のこりみで種又衣をにりたもく成よけり

四月一日によみゆける

和泉式部

きのをい花のよきと書してさかふさういり者別れ

お月の比重梅と人の許日じりりすして

赤染末門

田さちね花よをかくとせし者さやしと思ひさうとん

永文四年四月言好又言今日お花を

丸京大夫歌補

朝日ふやせし乃里のお花をうらさる布と思ひける

ふ又百番言今日 二乗沈讚妓

井まじらお月の花も咲きつと山郭るゆいりさる人さ

弘基百言言ちりける付

式乾門沈中更

後乃にんねいりうらさる付言喜里をのよ一多とら

歌しりす よみ人しり

物言をいづるに心を引くことすし補にまじり人あつた

幸子院言合に 土原元方

みよしの内り物言をいひしことすは深くまこと我若好む

歌一しす 兼大納言云に

いふこときつねつよのいひしこと内り人のまじり物言

夏治百言言あけりし時結州島

後凉車院女おゆ

いひきひに言あつる時よこそかきよふて切の心

甲一んを 用白家新女持

切の心と交わゆる我の勢をまじりしこと民福をいふ

兼元百言言あけりし時勢云

兼冬議雅孝

外へてまじりし心いひしことか及なりて同一心なり

百言言あけりし時 兼冬人長

我なりぬ人まじりし心いひしこと物言に我なるは

兼元百言言あけりし時勢云

兼用白を及人長

いひしこと人ときりかにいれをを我力にしに恨さる

夏治の中に 兼大納言師重

いひしこといひしこと時をわたりし物言に心を引くは

志元百三十四年十一月廿九日付郭ら

麻大納言後定

に我らるるをいにておぼしめし候へりしに有明の月日御之

おぼしめし

伏見御所御

に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

歌

及京奉後

に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

女侍師

因りしにいさうかけに我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

伊豫

付寄よりりしに有明の月日御之に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

徳田郭らるるを

麻大納言

に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

人おぼしめしに郭らるるを

けり

源道濟

に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

及京の中に

伏見御所

と云くはに候へりしに有明の月日御之に我らるるを月ようかに行りしに有明の月日御之

檀中納言奉後

何これに... 我も又... 藤原為宣朝臣

後醍醐天皇御製

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

藤原為宣朝臣

我も又... 藤原為宣朝臣

かよふやう違わつたあの一ししと好むに秋也又月面のえ
夏活百も言ちりける付早苗

祝部成茂

又月こぬきうろふ田も志あつて秋のまゝ人子尚うらもし

まろくまを

堀村右人良

りししと思ひぬく成因よりつた田の澤もさる人うらもし

ふ又百番う合に

野宮九人良

是川のふしし氷をむさう巻すうわの田わたも尚うら

は眼は海すうりかへし野村十八も言に

は下定考

飛しきりき野ふ山田のねりけよみとつをうてさるうらもし

二品は親と家又十も言に早苗

津も園道

まろ車うらもしけろかあらしの松のほ田にも尚うらもし

歌しし

信大
蘇中納言経継

田らくは花梅のよりふししはまもこ岩の好むに

百も言うみかける中も

皇々后官人史俊成

ちろくにうらもししと思ひもつらうら乃凡かちるら

二品橋言董こしりかを

尋ふといふぬらの谷水と書めてけつこ又月雨を
け又月雨をいふを 兼人納言考也

ふ川乃若いとりう音とるう人子浪ぬ又月雨のふ
百言考也一付

ふゆのうゆうふこよ湯と新之みね又月雨のふ
池又月雨を 権律師實性

いけ水の汀とみこ寸成にうをに浪と寸又月雨を
歌一付 人江宗秀

り敷つゝ浪とみこ寸又月雨の書同とみ寸ゆりの橋
高階宗成朝臣

又月雨にふれく下るふ川のまふれ松又いふい浪と
百言考也一付 兼人白衣及人考

たをけみふゆうと又月雨ぬと斗と我也と
歌一付 兼人納言考也

又月雨のりささあしはらうと風と水まさつた
兼人百言考也一付又月雨

あしつ河汀のなみとまういむじらのふ又月雨の
兼人儒正道昭

水留らるるのほら言ういけ候事ゆりこ又月雨の
兼人儒正道昭

大井けうみくくをいわうる月いそそうのふじ
一あえらううりしり付

蘇大納言為世

うひみちりしりのなる白浪にしつえくさううのふじ

歌しりし

順徳院片製

朝あつとじのうり野より草のきりしのはうに成つた

船恒

交草いりしにゆり成ゆをこりれり人のこいあ若うふ

建保又年四月亥申又うりに交曉

系漢雅行

交草乃居口をこりしとせんと曉井こい袖う冷し

百ううりしれしにがてり

信身所製

なじ草の花のえしにそく屋を又月のまよあつて

辰三信宣子

所アわし交野乃草の原けれいあけりうようのま

交草をうりしとせりけり

院片製

今月のしとをうりあ若めしはるこにう庭の交草

信身所製

和を以て因りて人のとちりて為る者りて度る處に交車

山本入道麻呂及人老女

少丹して車乃るを案じて野の如く交わりて度る處に

前入納言為世人とてしりてしりてと依り春日

社三十九の言の中より藤原の系朝長

交車乃りけりぬゆゑに疾の疾に下りて故の凡を結し

言とてしりてと依り院中執事

凡てしりてわらま乃る言ほのみにて流の如く結して後

志元百言言あり付印しんを

前入納言後言

交指しりてけりぬゆゑに疾の疾に下りて故の凡を結し

贈後三位為子

大井河をよとせゆつて海大にわらぬ言の如かりし

凡てしりて裏百言言あり付印しんを

前入納言為氏

りかてり付わらぬ乃治の車のとたりにしりてしりて

百言言あり付津也國文

言とてしりての清水の如くしりてしりての言の如かりし

文正八年七夕白川夜まゝく人言とてしりて

百言言あり付依りて付蚊遣火

藤原納言為家

蚊やアト火ぬきくやとくわね煙ごうわごとの若もれを

夏三つの中に

西宮丸大長

とらこもよみんもとの他のおれいひるる床夏花

寛和二年の裏三つ合ふ

藤原惟成

ふくぐくくももろく梅子の花ぬこつを今とみ

弘長百三つあけの付々々

衣笠内人

は里もあやめくひん々々々のくもろくろくにまよけ

後二位為家

わろれ乃もにもろろ春向のむらもろの々々々々

又元二年七月白河夜もろくをこく

て七百三つにのりあけの付渡々々々

藤原納言為家

鳥津浪をく吹めてく塩凡の女もろくもろ

夏治百三つあけのいあろく々々

後醍醐院御歌

くくくくくももろくもろくもろくもろく

弘長百三つあけの付

蘇東議社清

いしつひくくわら々々乃れ成平御ちまう清しよ

百三十九年十一月

入道蘇東議社

々々いよわら々の村をいよりかのみく青の指妻

々々を

祝部成久

種とく晴にうしこいしにいよりぬれぬしうふ々々の

歌しつ

中に裕賢

ぬこわしいわらり集う交交すも野の系ね指を下凡_法

凡も百三十九年十一月

蘇東議言為氏

清しつひくくわら々々乃れ成平御ちまう清しよ

歌しつ

宗洛入道蘇用白を叙大氏

もはなをなをう入替はしり

々々いよわら々の村をいよりかのみく青の指妻

建保四年百三十九年十一月

蘇中納言宗家

友衣がらよ乃浦はううわは波のよらうかう人故凡

久母百三十九年十一月

と西門地無係

なにいふかこわらりも清しよい集いいよに故々々

山階入道大久氏家の中三十九年十一月

源兼氏朝也

きりぎりすをよみ水どうれあきぬをいふ

夏尋中に

為道朝也

夕暮乃木の下凡よるをいふとゆまきね蟬の羽衣

兼道法師

きりぎりすに後ゆきあきとて夏との枝よりにく蟬のよらあ

百三十一首一付

大僧正道順

きりぎりすに蟬のあきとて夏ゆきとてねが下陰

用白の久長

序とあきとての枝あきとて蟬のあきとてあきね

兼用白の久長 押上落

あきとてあきのけねとて夏ゆきとてねが下陰

昭訓門院春日

あきとてあきのけねとて夏ゆきとてねが下陰

夏治百三十一首一付六月後

冷泉の政久長

あきとてあきのけねとて夏ゆきとてねが下陰

百三十一首一付一付中に

皇太后文太史後成

あきとてあきのけねとて夏ゆきとてねが下陰

ふ又百書うゝ合に

後鳥羽院御歌

御後河土の玉もみくれくまをねね

こゝろいさし

續千載和詩集卷之四

煥奇上

百三十九のりし時初煥のちを

入道麻衣人衣

いりしころく袖もまのぬまくは煥の初凡

甲しを

中務下宗意親王

けさみれはうむゆきさるのやれこのつよに煥もま

ふ又百書う合に

惟明親王

きのふらと疾は下葉にひさげさわらう煥の初凡

乙しを

光明宗子入道前掾人衣

いづのまに娘凡きふとくことのこしの廣松言ほうとく

百三十九年一付 前中納言為相

天河木を卓のいづ娘のかれちへ一年のいづ結ん

中納言家持

七夕乃われのつとすも天河きよと月とを平とら

山邊赤人

むし星と七夕にやこころいわん天の河系よ流るにやめ

喜子院言合に よみ人

天河のうとて後う七夕のやうとんもおれいさる也

壱山院位よおゆりける時七月七日

七夕言めとれけるよよみくちりける

前中納言為家

銀河流るこころ思ふ七夕もわたりとわたり限つてい

家の六百番言合に乞巧奠

後京極坊前女院

是言乃えりてふとこりる物い言わの庭に思はこりて大

七夕のんを 前中納言有房

織女の家ちとての玉かにいづ娘のきしとん玉乞

八日前裁の家をくつを折ては成ち入る前坊

のせいにうつりすしと

選子に親王

春をこころひのゆら寝を思ひて我天の河原の邊をうら
らむ百言をうけりける付

入道前右大臣

明神をいよの流のまゆり又神やうとわよとほし

歌———付

源兼氏朝臣

七夕のそ乃衣をゆる凡そ袖ぬわつたれいよとこゆら

同日七夕に云ふを 兼中納言定家

契わつとゆり又月の枝うらう今世もいよと天乃川

太神官よもいよとを拾けら又十言の中よ

後鳥羽院御歌

朝倉乃そりい壺京に凡そ我をぬけうらう

歌———付

わらわらふくふいじうは娘國とそ夕言の萩ゆと凡

正治百言をうけりける付

兼中納言定家

幾つうらわれとそりい萩をいよと凡の娘え夕言

よ又百言をうけり 二重院讃歌

よとそりい娘ぬわつたをうらうとわれとそりい萩の萩ゆと

連懐百言をうけりける付

皇太后之文也後成

我神の秋のふれにのちてしうまめくうに春のつゆ

寛和元年内裏言合小倉

花の飛片製

秋のまへにとける白を玉うして神にけしめし由ゆり

赤元百三言ちり一付秋

檀中納言の権

つこくた夕の秋のまへに調とうどし梅凡うく

秋一し寸

法眼慶融

吹しすぬ秋のまへにまを神ゆくさうし梅凡う

弘安百三言ちりけり

入道藤太政大臣

夕まれの野を乃成芽に吹凡のまへにみねをうしり

弘安八年八月十八日三言ちり梅凡入簾

藤太納言為氏

材乃野を乃成のまへに由我神に吹ゆく梅凡う

秋一し寸

伏見院片製

ゆりまめ乃桐のまへに庭面の夕へ梅を同人とる

後二重院片製

若し乃夕言こし梅にけし我まうさうしあめりし

周中娘々こゝろの事を 前中納言定資

さかへ事をかたむくあゝわ若るは娘の事といへ也

娘々の中に 二不法親王光助

今更母のつらやうとつていひし思人のまうは娘の事

前中納言経世女

物思ふ人いふもまやうししうと若利しいの娘の事

平久時

いとまも思ふ袖乃ちううに不きあうは娘の事

赤元百三十一時時

左政人志

と乃にうう洞しやもよもつ袖にまやいそは娘の事

建曆二年の裏赤う合に水は娘々

後久我左政大良

あま肌あまのつたを草乃下あや娘めく麻の洞らう

歌うた

慈義門代

娘よあへ也袖のまうとや草葉くさはてしらんまうまる

名所百三十一時時

前中納言山家

娘の事を娘々の事を野のいふとよら床は草葉の事を列つ

兼景殿の病にゆき入付はける

九条右大臣

白萩乃をくしりよみけり花すこさかよみかく凡よありさわか

歌——久

津守國通

むすこいぬの洞こもまらふかの神のみつる花の夕え

あつ花蘭こいふしを

亦信正通性

夏いづ何句あしすみ捨て野こけら庭は流るるえ

天慶八年止屏凡止

源三忠朝長

梅乃野にまぐさける花みれいゆま花ういじとまらわ

夕暮るこにちいさこはすしりそ入る世の

うとやうのけりみかく花のたにうてあつこ

所乃名のつこまき路て外院にうてをりて

うのけりみ紙は書けうとけり

よみ人——子

まめ乃うらの花は白いと鈴虫のそこものこに因あるとだ

ぬり

選子内親王

まぐ乃花はこりあに白ふこも野原の凡とまきとのまきけ

歌——子

藤丸兵衛督教宣

つら若乃をの梅夜咲しけ吉朝をく春のまらうらゆ

邦有親王

多岐乃秋之也ト又人の神にトトナラシム

辰之尾氏久

多岐乃秋之也ト又人の神にトトナラシム秋の朝

建永元年和言所ニテ言^公に朝草花

二尾家隆

乃の神にトトナラシム秋の朝

秋

よみ人

乃の神にトトナラシム秋の朝

乃の神に

朝の秋之也ト又人の神にトトナラシム

野秋之

藤原為定朝臣

神にトトナラシム秋の朝

百言言め秋にけり

信正の意

多岐乃秋の秋凡吹く人ト又人の神にトトナラシム

名乃百言言め秋にけり

信正の意

多岐乃秋の秋秋咲けり人ト又人の神にトトナラシム

秋

大納言旅人

さしすさるるその小野は萩のむらさし時うひて徳

後徳久もた人長

思ふららしくみはゆいし又地野の萩のむらさし時うひて徳

任し忠孝

娘らさるるさしはかみかくくく麻の園むらさし時うひて徳

永承又平祐子内親王家の言ふ令に

相摸

萩は小萩の下まむらさし時うひて徳の野原にさし時うひて徳

麻をよみえら 小弁

さしすさるるその小野は萩のむらさし時うひて徳

百も言ふなり時 麻用白た人長 押上路

さしすさるるその小野は萩のむらさし時うひて徳

忠房親王

さしすさるるその小野は萩のむらさし時うひて徳

娘の言ふ中し 任し忠孝

萩草乃とまにくみれいし時うひて徳

名所百も言ふなり時

任し忠孝

萩草乃とまにくみれいし時うひて徳

歌しす 任し忠孝

夕々我にむきよりと燈籠をにらめしと麻の鳴る
と元百三言のむきより時麻

蘇中納言行録

我こそもむにむしにらめしと夕々言ひさう妻を麻の鳴る

法下定考

高砂の尾との麻に我をむきよりとむきより

歌——子

行念法師

燈を——麻のむきよりの高砂のねむりむきより

中務卿宗言親

火を山家のぬきよりとわらわはと麻のぬきより

月下麻を

後堀河院民平の典

とを麻のむきよりのわらわはと妻をむきより

蘇中納言行録

月をむきよりとわらわはと妻をむきより

對月同麻をむきより

平貞時卿

とをむきよりとわらわはと妻をむきより

歌——子

蘇中納言行録

とをむきよりとわらわはと妻をむきより

蘇中納言行録

月みれい風の思いもくさしをなすよし大に麻ハ鳴く

正徳三年八月十八日奥白裏ヤミウに鳴月

同麻

九人カ

ようよく我えりやうまを麻の鳴ひを聞きしる羽のを

あ元百三言あり付麻

入道前々及人カ

むすくほのたきをいぬ麻のころ野のまにきり鳴

麻大納言考世

ふら田の店まのくは麻身にもら人きりききる鳴なり

百三言あり付

二品法親王光助

炊事になかくれけりやう麻ハ人かきりきり妻をこり

田家麻也

権僧正桓守

ふら田もろ賤の社まの折くや又麻の子かきりきり

田光地入右前用白及人カ

よさじなる田中の井はぬ炊凡は稲葉をとり麻う鳴

山麻こりなるをとりとけりける

法皇出書

あうりなる炊の長を福のまき事のを麻も鳴まうり

あ元百三言あり麻 万炊門地

あう麻のおまもけりまきりきり紗の屋とぬ炊りよさじぬ

歌——子

平宗春

海よりよの衣はぬれとまらむ此の衣斗に麻の鳴く

飛中納言季雄

ようよ又泪をうへく同うよまきく麻の言ひ鳴せ

淡野玄門地女

是迄打る^指いふくは凡も我あしよきは麻の妻をまき

はま百も言りけりわがしよ

龜山院女

あはけは麻をく野への小萩京下紫の衣もあまわが

初尾を

は二位初家

萩のうへは衣いにしとまきく今が言わの尾が鳴た

蓮生法師

尾鳴く萩の下紫の衣にく我袖よりうらむは物

平宗宣執事

よ凡のまきく執けは衣まきていくはむねは尾金

屏凡言に

躬恒

ゆらむを思ひまにくは尾のむねのふいふまき有け

歌——子

人磨^海

刈がふ言わはるまきく物をいそはるはむくはるは

よ夏百番言合

後多野院女

わつしふ雪のふりそふ夕暮に天に色ぢらる初冬ともなふ

百三言あり付 梶中納言為友

煖凡よきにけりよきつかこもくしきしつうよの夜りのり

暮中雁を 函光院入道兼用白土政大直

杖乃わししをめくは夕暮のついでにけり初冬の夕

身をより先か 友系宗秀

身ららう室の八鳩の煖凡よあつとけりい煖をわけき

人江執重

つと夜する野の身いけりをつと尾むの袖の春をぬて

よみ人

さるよ野系の手ぬ下衣に潤あそそと袖のぬれきり

百三言あり付 是中定考

日氣よけりこの花の冬く日春をかこてけり朝暮

は春百三言あり付

兼大納言も雅

まにめく日氣くこけりけりりり身の難にありわこり

歌 水福門地

うらむれく禁をくころ人のけりさころ野の身

文永二年八月十八日又其又三言あり日未出月こり

まな 梶中納言の権

里人のおしんいさむねしよのちあいの月うきさる
走後朝長より子付けの音そり前に

後平隆裕朝長

夕く我月結きえしむを思ふ雪のちここの娘のよひ場
へく月結んをよみ付けると後日因て

藤原實成朝長

流うとに結つる月を留ますと独とを成なりあじけら小

歌

前大納言為家

娘凡と暮らゆくと成出つて結行しむらつるよひの月
入道前を改人た

阿こ我にかをいぬくさ砂のみめねね月うらつるよ

伏見院后よおまじりけり月十又そのまのま

我申日

前大納言為世

昔らま乃をいさぐにうひて留と孝あし也娘のよの月

月の言の中に

氏平實教

ふろくのらる我がうそ教みてまこ我也娘よぬる月う那

藤原白を改人た家潜俊

出さるわねいにさそよ島のあへま月も雪ふくしてう

信實朝長

くらよ乃花にちをさるけりてすまぢりしひの月

堀川右大臣

夕暮影乃暮と暮に此ら暮月のこ暮乃暮と暮也

此助は親と家又千と千也

法眼源集

待出らぬの乃月いさよにてむら川雲に故風うき

歌一し子

紀伊氏朝臣

向こもく乃わろのほは乳みて松系をぬる故はよの月

津も園友

天に凡雲吹こしなをよの神ふると志故の月のをよ

平貞文

面晴る賤の外の板の間より月よりあらくて袖より分

二条右皇太后文持津

春日山幸の片は千晴て照月をを幾よみつし

河院抄の家百と千に月

信實朝臣

雲いみる晴あま乃故風はくよと月よりこ

一か元百と千より一月月

津も園友

とてい父と人しんせおたもあしこよひの月志故のこは

百と千よりみ分けりよ

可成りなほし 身と后宮大夫後成

月をみくも里のゆを思ふもさうかう白川のきさ

同月と 権中納言為友

輝乃よ開け戸さうとゆるさるめとゆ久ふ月の乳を

中宮きささこはゆらゆら西園さよあらし

面^あけらるる幸をいけけるよ八月十五夜月

面白^あらけれは中宮のちるさよみくもあはれ

ぬくける 水福門地

今夜と雲わの月とぶらうふ娘の涙とを思ひさる我

ち^あはれ中宮よふつとさあわくよるれとほくける

今上御製

昔みく娘のちと乃月乳を思ひさるや

思ひさる

續千載和詩集卷之第又

燧亭下

月不撰如こしつんを

大納言經信

久く乃をにり我ら燧も月にに我の里もつみこころ

歌——ん

鎌倉右大臣

月み我の衣よさじ——うとをそと捨しのきき燧は

高元百三十九年一月月

入道藤左大臣

にくくこなるしう^産——に方うしに月より燧の凡と

氏平の實教

物あふ人のいせし燧も月うこそとらうしを待

月のうの中よ

藤久信正實集

いにあぐつたこみるつらむらうの力た切末がうと

五田^{注師}よみん——

到くみらり光の月のまや六十如燧の刻はなるを

百三十九年一月月

高元百三十九年

光り世に燧の心も我をうとらうをにくくのそ如月

藤久納言考世玉津嶋社——うな——

付月

前日大に重

片久にけりてうつしあろりるをむく我力平の娘はよの

歌一子

民平の資宣女

いあにすむこまぬ歌あつた月いづく世の娘をさるは

後久我を改大良

ありまけり富はじりの名ぬ世の月とらるるぬ歌う良

建保四年後多野地より百三言ちあけり

各議雅純

娘のよ月よいく変るる先くわ男かこの力よ持るは

百三言ち中よ

殷富門地大補

世間のうごはしをそとあつた月をこのいぬあつた

教系光後朝たよりとゆける百三言ち中に

漢壁門地但馬

たまをいふきよこ今年又月みら神のおまはらるるは

歌一子

民平の實教

娘をへくこつと刻也つづの神の月い潤たりいさつと

前儒公朝

いづらよ月らる人よりしむくよそ國くまら潤らあま

平付書

人いむはりの娘なりとてそそとていすあつたのい

津中園道

ちよよの雲をいじくも切つて春をさする野の月乳
百言うまひ付 北将内侍

そく春乃りく源草里にわけて月のまじ野をぬけつれ
月のうの中よ 皇々后文人支後成女

尋ふと忘れぬ月の氣うらふよもこの春のふさを
皇后宮

娘秋のむねの春にりをさる月とうけりふさやわづ
後京光後朝長

木の葉ゆく秋凡さしは是のよきよとてつる月をさる
桂中納言の雄

春のうえぬまゝの田うらふよかつの里の娘のよの月
建永元年九月十三夜鳥羽夜又三言^{のり}水郷
月 蘇人納言^{のり}為家

黒乃名色わくは日志るも月の月極志娘のこよひを
仁治二年九月十三夜九人屋家十三言^{のり}の中
日月蘇平 源有也朝長

月乳乃をさるりやうとてくはつしとちつこよそのほま
付^{のり}月と 藤原朝長

みじらふ春にけし雲の晴ゆく秋なるは月とてけふ

殷富門院まゝく人々百々言ふみ分けけり月
言え淡ゆける 麻中納言山久家

こちを河まぢらぬくの月をみくへう娘ようじつとそわら
河月と 平維貞

大井河まも娘い老あてふ月よなりうらゝ氷のまゝ流
貞元百々言ふまゝ一付

麻用白あぬ人た

凡そうらゝかの氷海を晴て月氣きよ一魚はけりゆら
は二位り家人々よすめゆける付位言十そ
言合り江上月 麻大納言為氏

位の江のねの娘凡言信くそよをめよりの月り言
寛元二年七月の比位江にまうらゝえ既明月こ
りまをよみゆける

西園寺入道麻太政大臣

位吉のねも我力もゆつよにけり表こおもへ娘のよの月
建治三年九月十三日又そら三つよ江月

麻右兵衛督為教

果んちのこ氣もらゝ子昔みへ師の入江を娘およの月
娘言の中よ 麻惠法師

老也れいじり計もあゝ先ねをんらゝし月やおまらえ

平泰時朝臣

よりこし乃波路かゆく舟人かんのうらね月のみをこ

百三十一

舟中納言考後

すむ月乃乳さうらんとく入江おく片かみ舟故凡うやく

江月こしんを

後二条院抄製

りよ此る夜のくら凡うらうよさ入江よさじしすあら月乳

百三十一

舟中納言考親と

更ゆをいね凡さじ一人ものこしのこほりの故あめ月

道助は親と家のよすをうらね中月

舟中納言考家

よりこし乃波路かゆく舟人かんのうらね月のみをこ

百三十一

舟中納言考

よりこし乃波路かゆく舟人かんのうらね月のみをこ

舟中納言考

舟中納言考

よりこし乃波路かゆく舟人かんのうらね月のみをこ

舟中納言考

舟中納言考

よりこし乃波路かゆく舟人かんのうらね月のみをこ

舟中納言考

舟中納言考

浪がくろく一箇の管で故をくわんとまきす月燈
ある月こしつかしを

觀意法師

古くはあつりわたりあつりく昔にのりる月を乳のえ

位吉祐よせりけるやその中よ海邊月

麻人納言為氏

あめつこ浦よりそらぬ月乳み流てくそわつらぬ山

家又すそ言よみゆけるよ山家月を

入道二お親と道助

^{そ飛のあ月あり}
こふ人とわし吹るふこくには又柴やせくる故のあ月

えーし寸

兼鎮法師親王

峰ちりこころ乃と凡ちう一そ月乳さじこよめよ枕

麻人納言為世よりとゆ一言になる月こいす

そよみゆける

法下也舜

われよをつとつちと乃若のいふやよのまに月半先

高気百そ言とあり時月

法下定考

くそくそ心燈やあつら故のこふいマウ入ふかよ心月乳

今と後よしりよをおゆ一して後護持儒よく

りつとく二回もあつりかへく淡ゆける

慈道は親王

人よりまじりうみけをまね書わたりしるふの月

禁中月と云ふを 春交信人吏有忠

今とちりるにふりては かた 力ともまじり書の月の

二おは親王家又その前に竹岡月

正二位為實

うし乃乃人まはしとてしるふの月を云ひては

月のうの中にも 本邦マ久月親王

しう野入つてま乃をけれは久くはのうの月

亦大信正に澄

娘のう乃月いりてはつひとも うらやま 我すしとの乳うまけ

鎌倉右大臣

うはつは良のう凡そくまへ月乳をいし 志賀の幸徳

津守國助

け凡。有次の月を結せくねねよ更わらうらの橋姫

水に二年八月十又央中う清とてはけし

月岡鏡こいハまを 為通朝長

あをゆけハ鏡の云ふことわじ い 定に因えす 乳 月

云ーくす 大親王隆特

明やわ鏡の云ふこと い 乃くま い じとの松京月う

人炊止門をぬ人長女

鏡のまにほえては我の働まは定にう月かうふふにけ

百の言のまの付

前入納言後光

もよふとまの思ふうづねの枕のうへ月うこも

前入納言考世

明るこもよこも月乳も雲こるあけ我流うこ我

海と月を

書進法師

よりのみわりあうも海の波も月うこも女

月の入をみ

慈恵法師

月の入のあまこの里人こも月半あまをうま

云

藤原實方朝臣

雲うるあまこにまこわあ入火の月のけけ

後鳥羽院止書

池乃うへよな我うも月奥の松の葉の有明志月

為通朝臣

いづましちこも人の夜も月を我わくうも

友東京總

わのうみわくろもあけ我月まにこもあ

草村止こがゆを 源順

草村乃うへ月をこもあけ我うもあ

建治乙未年九月廿二日 又さうり日野忠

大蔵少輔隆博

表にたいして社をうつさぬのには、まづら申の夢をきりて

表——寸

前掲致九人氏

此書にゆゑのひらへん、とあるは、若しうの事、こゝろをね申うや

百三言あり時

昭訓門院春日

更とこころいへることも、みづめね申のころより、布し移るるは

前大納言為家、百三言に

は二位家隆

卓の系、うらや、其の娘、凡そ人、まゝおしね申のいふ

又申を淡かける

神祇伯躬仲

夕まれば、蓬の移やのきつ、く、寸、柗の志、こゝろを、う、因、ゆら

は長百三言ありけり時申

前大納言為家

きつ、り、寸、申、人、を、い、た、こ、も、あ、い、よ、ま、く、え、な、る、初、は、

因、申、こ、し、ん、か、ん、を

今と卯辰

な、ゆ、り、こ、ろ、を、ね、申、の、き、つ、り、く、寸、卓、の、柗、は、恨、く、さ、う、ま、

表——寸

氏、ら、實、教

ん、こ、ろ、を、さ、う、り、ら、く、し、ま、り、く、寸、ま、の、洞、心、を、の、よ、ま、じ、

春、ま、大、丈、を、賢、

いゝ又忠つゝしら浅茅京をささぐ小宮乃よきまゝ
亦人納言為世よりと依一にささ言に教也

鎌京基日記

我ひすふ浅茅の京乃きつりすの我にせりし言成り
歌——す

又のりら浅茅の京京家ちりて忠のひさじく坂凡う吹
は甚百さ言ちりけり

後九条内人氏

浅茅せの京よの忠もあすみくさつらなう月いほ
故マ忠を
ちら門内人氏

忠のひさじくお故の恨もすみ捨てける浅ち人の寄

百さ言ちりけり 九人氏

下紫らら小野の萩京ち凡に床わ我想ちや熟なるは

資治百さ言ちりけり梅田

皇々后又大夫後成女

小山田乃居ちら殿の娘如神宿りら居るをさわひら

田家持衣を 考道朝氏

よまじれらりりか乃居のいほえに山田をもちと衣うに交

家七百さ言ちりけり 凡前持衣

光明寺入る前持衣九人氏

衣にけしきおののきもさ同のしは女まに焼くやうな
おえ百そりやま一付掛衣

は下定考

おののみくしじ焼は袖に衣ぬらう

里掛衣

は眼兼巻

焼うとつらおさの里人うらさじや女ん

お

藤原盛

尾花ゆくりろるさじ焼はうらおさやに女ん

百そりやま一付

ゆん

古乃月をいぐよのみよ一野のしはさじ衣う

焼の中

赤旗雅行

涼車や舞のゆらにぬれはわれり里は衣う

おえ百そりやま一付掛衣

赤人細言後光

喜遊に衣りになる里人のよさじゆん

因掛衣こしん

今とち製

うくちる焼のさあおまにうらさじの民おをれ

は百そりやま一付

さむらひのあか人とあやもみ入道麻衣女大長

海邊拵衣を

人江貞重

故^標くじくちの海乃わよみ人波の衣をさかすは

蘇人酒言為家人くもりのとけける日吉社

又中そ奇今日湖を拵衣

蘇人酒言為氏

う浪りよくころわよのね建衣うはまじくわ

夏活百そ奇もけける付回拵衣

皇々后文大史後成女

あらしきうわよその柳まき落をさくう衣

拵衣をさくうを

伏見地所製

せらり子碓のまにさくうをさくうの衣

歌——子

遊義門地

うら切すきわこのまに乃ちさくうをさくうの衣

百そ奇もけける

忠房親王

終夜月みる人のいひくくにあつにさくうの衣

拵衣をさくう

源邦也朝臣

海辺のうらく風の月乳よ福さう人の衣うら

長二尾宣子

賤うらよその碓の音のうら故ははまの衣をさくう

百三十一

麻は信の書雅

此れけりやまゝさうけりし白の巻の巻まこの麻あもさ衣
ら母百三十一やちりけり付

人の隆特

神乃人も房もみさるく故凡み流の也の衣うけりし
巻の所の製

あつしけり故のり敷さうへにけりのよまくうけり衣のふ
性助は親王家の又す三のに

は眼源泉

白妙も神の初亮月としてりしよまじらに衣のふ

久母百三十一

身々后又人吏後成

とけの休のちめにはよく早しうみら白等も花
也島所事合日 藤系真凡

ちりと危なし所のむれらにらふ多の惜くもは
難事也 二品は親王是助

故中の所にあるふくむとわわし白く等
菊枝にけりしとはけり

今上所製

仙人のしとは故なりしとはくるとはけりし白く

白妙

は白妙製

ひまわりひまわりも月のまは枝よかきわらふ世代無きゆかし

重陽の心を

新院別當典休

行すも枝をうさひてかきみも世甲くめでたくもまは枝

歌——寸

永福門内休

あつげの枝のり枝ともあをうらふまらう庭の白草

百三三のあり付

前用白丸大長 押小路

我神も庭を眺——くも月や末野のまむう枯るをう

歌——寸

平付敷

も月と末野の系はたす——かのくに眺ら枝もまらふ

祝部成久

下ああ乃うしけらまはうしけれ紅糸も枝の内ををり枝

洞院移ぬ前丸大長

津の國は白田のせう乃初内るわすまらふ紅糸走り

前丸大長 通

染くけま三室のふれ初め糸内るも庭もまらふ

紅糸一樹こころを

紅大前中納言経继

いしはらも染くまらう紅糸小共一もくちを内るを

歌——寸

檜中納言為友

むらさきのうらまらふもみらまらふ人か折てかうし

百三十一番

用白内大長

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

前赤儀雅孝

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

娘言の中目

信中納言三雄

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

信三信為信

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

修理大夫政孝

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

清系元補

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

貫之

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

後二信家隆

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

贈後三信為子

あしつれいよほして無ふよあしつれいよあしつれいよあしつれいよ

歌——予

藤原為嗣朝来

ふりつらゆぐらうのぬき人こりいふいづこのふ野の炊凡

新地片断

ちりけら座の紅葉と御つくと炊のりねいしゆりしと世

永に元年冬十月十号に何と吾炊

九人夫

ふか何なるれくともこ^て又紫いと向らぬ炊かゝいみか

後三任師行

幾ぢく炊のるつこの大井川の言志りいづつともてふ

暮炊菊こりくろんを

伏見地片断

おちくういりらひれを炊かゝのこつとみする白菊の

正和三年九月書日十号日曉情月

后三任為理

の輝のぬか思ひわつこもあつとやいみね有雨をの月

歌——予

後三任片断

いづち思ひ推ていふすつとこ向らぬ炊のつれをかれ

正元百三号より十一月九日也

藤原納言為世

かみかぬりりりいもくもくも力御つたじぬ炊うこ向らぬ

久世百三十一 上西門池無極

わすし〜わす成道くめくつとまの娘の別をわすし

後素極極取内人たふ依ける付家よ十三言後

依けるに娘 麻中納言定家

松嶋乃わすの衣は娘くれくい川ふふさじ

后も付る也

續千載和歌集卷第六

冬之哥

付る志多し〜らんをうりと娘けり

は是也歌集

付るゆ〜る〜とある〜秋五月くもあ〜わすをよまぬ

山付る 院也歌集

い〜しけ〜に付るの音ねと娘をみ〜と友紅糸小

歌〜し子 後二位家隆

秋五月付る〜もたにわすのう〜ふ又葉と冬の始ちけり

後一葉入道兼用白丸大老

けいごんと同し書わを秋三月付しりふに後付るふ

中教つ宗を親王

きりやくを書の使みく付るさうくはまの御記

は書百そ寄ちりける付

入道二親王御勅

かじりては根よりさうさ書いさうにさうさ付る付

百そ寄ちり付 檜中納言考後

えいけい付るうゆうらうさ書のいさうのさうさ付る付

さうのさう中に 檜中納言親居

さうさ付る付のさうさ書いさうさ付る付のさうさ

後徳大寺入道兼左大臣

はさうのさうのさうさ付る付のさうさ付る付

春上宮大史公賢

夕付る付のさうさ付る付のさうさ付る付

前大僧正實録

さうさ付る付のさうさ付る付のさうさ付る付

月乃おまたのさうさをみくさうさ

は下行漢

はさうをさうさ付る付のさうさ付る付のさうさ

百そ寄ちり付 前大納言俊光

雲のるをりくくわくわくと吹中しに降はる葉のふ

紅葉

赤旗の羽

秋の月夜やわがりのしきと雲に閃くやちる又葉のふ

鳥の飛ぶとけり御幸わつとくこそう清き

秋の月夜

蘇大納言為世

そ乃にうぬわがくまの片と名にうの秋てあふ葉

秋の社に紅葉のちるのみく

道令法師

おのなる秋の月こいまのぬや紅葉をわさの吹は

嘉應二年十月は位も夏三つ今も用路落葉

蘇大納言隆承

相坂の園乃りみらの唐錦ちるは袖かきり

銀しす

鳥の飛ぶ葉

友のふみらの文にししこのわをのうか舟行ころし

は事百も言もり付

権中納言の権

唐錦ぬじこのけのよみらと水の流うねるは

交治百も言もりけりいあふ

後堤義隆の葉

垣のなる草と人かきあふ秋の吹はるのこるあやまらるは

百三十一 時 亦大細言後之

おとこ〜ま〜み〜す 枯墨 白川 白野 白下 草

秋 五月の白川 白野 白下 草

〜白〜時 田を寒草

檀中納言為友

老の面に在る〜老の八重 藤のむく〜さ〜さ〜人か打ゆ

山階入道 九人 家や〜前に 寒草霜

津守國助

老の牛の草の枝は危す〜ゆ〜人か〜今や〜我を

冬のうちに 平政長

か〜ら〜ゆ〜よ〜と〜じ〜又〜枝〜わ〜じ〜お〜の〜月〜は〜つ〜の〜凡

百三十二 時 右近人将兼季

吹風 吹〜つ〜さ〜じ〜さ〜ま〜の〜く〜如〜歳 弟の 雲に 月うさ〜け〜こ

歌〜〜 源清兼朝也

至老〜到〜に〜よ〜さ〜〜て〜格の 小野の わららに あり 月歌

短之位 範宗

娘の 又い 喜 里 小野 小 雲 枯 月 月 月 月 有 次 の 力

は 皇 氏 製

片 山 中 一 の 鐘 小 夢 さ して 有 次 の 月 月 夢 に 残 り

後 二 重 氏 氏 製

草も木も枯れしと見ゆて野はわづらひ鳴る月乳
百三十一首あり付 信大納言終巻

にふりて豊のわづらひ年をへて又て春の月をみまへて
西園も入道前を以て大を又節しありける付中に
りけり
蘇中納言定家

昔もあつたの思ひはかたしとてわづらひの梅をさうりたる
ぬ
西園も入道前を以て大を

あつたの思ひはかたしとてわづらひの梅をさうりたる
百三十一首あり付 由大を

浦にさうりたるこの浦の島々塩みらくてに鳴るあり

歌 信大納言實徳

ちたつた女はあつた浦の島々さうりたる
夏は百三十一首ありける付は千島

吾部隆親

難波の^{ささき}けの島さうりたる同の島にさうりたる
西園も入道前を以て大を又節しありける
さうりたるとけりさうりたる中にさうりたる

三 津也園平

あつたの思ひはかたしとてわづらひの梅をさうりたる
さうりたる中に 平重村

うしろつらぬけの浦の鳥更へつらつ月よの鳥更へ

長承元年の裏十又三の鳥更

大炊内門右人老

ふ更へ告の末の鳥更へつらつ月よの鳥更へ

歌——子 和泉式部

なつこしの鳥更へつらつ月よの鳥更へ

夏原叔行朝夫

鳥更へつらつ月よの鳥更へ

為通朝夫

かろつこし浦人の鳥更へつらつ月よの鳥更へ

水鳥を 中務大恒次親日

こゆらよの鳥更へつらつ月よの鳥更へ

兼中納言定房

ふたやかの鳥更へつらつ月よの鳥更へ

鳥更へつらつ月よの鳥更へ

今とち朝妻

岩中の鳥更へつらつ月よの鳥更へ

歌——子 三尾信子

きつ乃とやの鳥更へつらつ月よの鳥更へ

後三尾行家

更ぬをいふにす流りもろくし何もの月如氣うのしけさ

如影法師

紅葉ものりをみく水のこととみくゆき早きを何ほりて

平付元

くまに今やもくもくくくくくくくくくくくくくくくく

友京重徳

うらよすら波もあつとくは浪江の声の系といくほり朝光

ら其百も言ちりける付

入道二お親と性助

あつれの声聞の凡いよきかへもよりのうら波の言ひ

氷初結ころのやを 後二重代は書

細代本にいつくふ海をぬりあえ八十九うら何いえあし

白川後七百も言に尋細代といふを

前入細言為家

舟七つふりこよふ浪の言りくくくくくくくくくくくく

ら其百も言ちりける付

入道前古久末

言ぬていぬにいぬくくくくくくくくくくくくくくくく

百も言ちりける付 忠房親と

あつれりあつれりあつれりあつれりあつれりあつれりあ

考の字の中よ

前代信正書雅

衣もにわらわらうましつらあゆむらうらうらと袖にまわくきか

前代信正考氏

片ゆくとも望野のり殺つぎくくれて雲の便あわくれ降ぐ

は七元年内裏こそ考の勝雲

雲乃との有明の月と氣さしてゆりや夏の玉とこほを

歌———寸

藤原考氏

衣の袖ににわらうけいとあつ風みかうらうらの春は白雪

沈吟歌

都はわらうらうらのこのゆるみかおとをこ我言海はるを

澄覚は親日

松系志く我も文もはるこてる田の小路も雪はわらうら

前代信正考世よりとゆ——春日は三年

考の中に

津也園冬

錦と山とうらわ我もをうらうら雲のあつぬ夏の雪は有りの

歌———寸

平村有

晴ぬまはあらしゆくけいあをうら雲向みけり春の白雪

冬乃は流りけりけり

前代信正通昭

巴里の雪はわらうらの雪はうらうら越ゆるまにけり白雪

きの芳の中に

は中下定考

よ歸ふと母のわがこゝろ今よりよきしむりしに梅の白雪

後二重院出考

いゝ又きこもりきらみより歸の吉世の奥の雪のかり里

祐子内親王家紀伊

夫の東よりこころしかり香に思ひしうみみよりのこ

中納言家持

あすの河に雪をいじりてのよにさしと雪う降し

皇太后文久末後成

梅まつるるにわがこゝろ里にりをうる香をなごころえ

雪満衣こころを は皇御製

けねころへも梅こころにわが雪のこのよらう衣うらさる

歌一し

永覚は親し

吹かすうしのまねに陰いかり梅よわしにわらう雪

よあえ百も言もりし雪

前久納言考世

高砂のまへに花やう花にわがこころにわらう梅の雪

後九条内大臣家百も言に嶺樹深雪こころ

ししと

藤原隆祐 明也

雪がれのまにけしは梅よけき埋れ果るる春の松原

松雪を

津也園助

同人を四じに彩し^{いろど}りたるていへるをいひにけり松雪のあまの

雪乃わ^あく^ろに^あみ^けけ^る

藤大僧正禅助

ちりゆ^あら^う年^をか^さら^ひて^かに^いち^はし^る人^の思^はれ^松の^白雪

松^の雪

津也園助

トおれの名^がう^まげ^て因^りに^けれ^まの^お松^の枝^の白^雪

大藏^が重^任

お枝めこくも^うし^うみ^ら白雪の梅^のう^まの^この^枝の^梅に

夏^原辰^威

ちりに^もた^らた^して^しみ^たて^梅わ^のの^おし^下草^雪の^梅

西^行法師

よ^うき^わき^して^よわ^ね雪^のう^まの^枝の^梅に^きて^守り^し梅

相^模

梅^の枝^のう^まの^おし^下草^雪の^梅の^おに^はす^しと^有り^き

大^江政^國女

し^らゆ^の枝^をさ^して^し思^へを^集め^る道^と雪^の梅^に

水^に二^年ス^テア^ラス^テア^ラフ^ける^竹雪^を

津^也園^助

あ^まの^この^梅の^うま^の枝^の梅^のう^まの^この^枝の^梅

歌——寸

後京宗行

冬枯のお花を——み降雪に入江と——りら海の浦も
浦雪混浪こころをよみかける

前大納言為成

うらよあつらな波をみゆる小舟を——けりもゆれろまじり雪
百も言まじり時 津も園を

ま田けおのくくひりけりけり秋はまきり雪の白ゆ
歌——寸 よみ人——寸

秋垣よ雪のまじりゆららりてあひくもみゆるねり下花
野宮まじり雪のわりかへけれ

皇后宮

雪うらに泣たぐりきりなわけ字わこまよとね秋はいつ
文保而言言よ 二品は親王是助

津園のまじりわらぬ埋れく雪のまじりよみかへり
雪の言の中にも 後京信雅朝臣

つをうらに泣たぐりきりなわけ字わこまよとね秋はいつ
西よはなはけり此雪のわりけれ

慈道は親王

侍へり成り泣をよみみり所の園をのたまひ白ゆ
嘉元内裏二十言言に

兼用白を叙大長

源卓や折の下道ふぢくく巾とにけり雪は明かき

歌一十寸

延明門院大吏

さゆら東の凡い多きし明日をて折の雲埋じけり白雪

正治二年十月^月号合日晴雪

后二位家隆

鏡の事にかつ明やふかむ我は後を海へ雲の白き

横雪を

正三位家實

いづこにゆくともちりわららふ雲もかこるる雲の白

山階入道左大臣家十三年三月の里雪

源兼氏朝を

後くすくふふ雪にたきくわすみの里を後同く

歌一十寸

正善寺衛朝長

よりうらひ人こりともをの面もたきく雪を想うらめ

権中納言兼信

こゑんせけし恨一あこすはにをくさるる座のまき雪

雪乃わかけりなごみすしとんかふり

一我こやくけり人のぬり

后下七條

かよふんたふりし雪のたきも雪はけり

凡も百三三言ちりけり付雪

衣冠曰大老

ちりけりふにぬを人の情に我うみけれをの白雪

雪三三の中に

前大納言為世

ゆと日多し我れさへも惜けれ人をよこぬを志白雪

高元百三三言ちり付雪

入道前々大老

ちりこころ人の情もゆきれわがちりる國に雪

歌一十

津守國交

白雪乃ちりの中道中くはふ人にしるさなるゆれり

百三三言ちり付

昭訓門院春日

ちりこころいこころをい同人の泣くゆきを座の白雪

雪三三の心を

後鳥羽院北書

片持すらふゆ場の小野ははらしてさうらふ志はよきや

正治元年新定言合ふ寒衣埋火

前中納言山久家

埋火の冷ぬりゆきをぬのめしむれをさゆら床はさゆら

百三三言ちり付

入道前々大老

雪ゆきに袖ゆらの月は更よけさ野原の袖も雪結ふさ

歳暮の心を

信之信氏久

久し又惜しと云れども我れはあつたつたの心から年々
前九兵衛持政定定

月々の心もいふにいふはわが心はわが心はわが心はわが心は
九人定

限わら月々の心もいふにいふはわが心はわが心はわが心は
平宣付朝長

いふにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふに
西光院入道前用白左大臣

思つてもあつた後の年々言ひつゝいふにいふにいふにいふに
西光百三言ひつゝいふにいふにいふにいふに

は中下定考

とににう月々の心もいふにいふにいふにいふにいふにいふに
八重高命

いにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふに
仁和寺二所持親と守定

いふにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふにいふに
この言ひ

うしろさふく 世にあらば ちかきこと 遠くあはれ
伊勢志摩の 磯つらき 雲を みらさすの 塩のうらむと
てにまらば 吹風ゆるる 竹わらわの 民のふゆと
まこといづく 万代あつさ わりゆく 氷極の園う
ゆきつらきこと

又哥

代々つらき 世のよるに ちかきわらわ ことす 日本
の 郭のちかき ことす ことす ことす
あよちつく ことす ことす ことす ことす
りくことす ことす ことす ことす ことす

あつぬきを 門のよるに ちかきわらわ ことす 日本
の 郭のちかき ことす ことす ことす ことす
あつぬきを 門のよるに ちかきわらわ ことす 日本
の 郭のちかき ことす ことす ことす ことす

又

赤人

みじしらの 秋のいさ ことす ことす ことす ことす
ことす ことす ことす ことす ことす ことす
あつぬきを 門のよるに ちかきわらわ ことす 日本
の 郭のちかき ことす ことす ことす ことす
あつぬきを 門のよるに ちかきわらわ ことす 日本
の 郭のちかき ことす ことす ことす ことす

夕きつとん かに^{かきく}はやく みるしは 移りのなるる
じり思へを

及奇^{あき}

飛鳥^とのふしうしうすまの思ひすくしをわ

よみ人しす

ふしうを くらふに 喜まれを 花^{はな}の^{はな}の^{はな}
娘とれを 紅葉いふ人 女ひよきま じり^{じり}の^の何の^の
か^かじり^{じり}きた^{きた} うら^{うら}も^もし^しは^は よし^{よし}き^きよ^よ う^うま^まし^しは^は
かう^{かう}し^しん^ん に^にく^くま^まつ^つて^て よ^よら^らに^に世^世に^には^は

久世百言^{くせひやくげん}を^をう^うけ^ける^ると^とう^う

花園九人^{はなぞのくにん}家^け小^{せう}人^{にん}進^{しん}

毛^けの^の成^{なり}を^をり^りま^まぬ^ぬじ^じも^もま^まと^とて^て こ^この^のつ^つと^とを^を
み^みり^りの^のえ^えし^しら^らる^るさ^さら^らし^しき^きの^のよ^よ
ち^ちみ^みも^もて^ては^はま^まま^まに^にさ^さら^らる^る葉^はの^のす^すも^もて^て
み^みつ^つと^とち^ちる^るさ^さら^らの^の枝^えの^のも^もら^らる^るか^かき^きま^まの^の葉^はを^を
に^にま^まし^し 祈^{いのち}の^のあ^あま^まし^しわ^われ^れは^はは^はら^らぬ^ぬか^か
み^みり^りの^のの^のふ^ふら^らの^のら^らに^にな^なる^るの^のま^まま^まの^の葉^は
わ^わら^らし^しに^にま^まま^ます^す 其^{その}の^の井^いけ^け 万^{まん}代^{だい}を^をし^し
す^すじ^じの^の光^{ひかり}の^のよ^よら^らい^いは^はる^るこ^こし^しき^きや^やし^しわ^わら^らぬ^ぬの^のこ^こ
う^うま^まし^しこ^こし^しき^きや^やし^しま^まら^らる^る 是^{この}の^のこ^こし^しき^きや^やし^し

可しつあはく 鳴くまに 因るのみを けりしれども
みかゝれども 人乃うらよ うち志のい 思ひをけりて
すくろまたに けりしれども けりしれども けりしれども
いらひけり けりしれども けりしれども けりしれども
すくろまたに けりしれども けりしれども けりしれども
たぢりしを けりしれども けりしれども けりしれども
くらしきま

旋頭詩^平

歌 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸 一 寸

あはく 鳴くまに 因るのみを けりしれども
みかゝれども 人乃うらよ うち志のい 思ひをけりて

すくろまたに けりしれども けりしれども けりしれども
いらひけり けりしれども けりしれども けりしれども

人^{麻呂}ゆり

すくろまたに けりしれども けりしれども けりしれども
いらひけり けりしれども けりしれども けりしれども

藤原隆信朝臣出家

あはく 鳴くまに 因るのみを けりしれども
みかゝれども 人乃うらよ うち志のい 思ひをけりて

あふりし中じりてはける

皇々后交々更後成

みしつゝまご思ひ一人とをわくくうじく世をうらうら
まのうらつゝ。

光

隆信朝臣

わつゝくちりてまとうじりて清きうくく我りもつみ世
うじりてつゝと。

折句詩 秋序

伏見院みへのしに申はける時よにらふす
わつゝくくえくむりてつゝはける御書

ぬりてあけらちねのうよきくハ後とこを
こいふしを句のよ下にまき

入道前々及人長

あれと又引くもこの我とがたてはけるむうこもこの
壺の流し付に屏凡すうとを折句くに
冠にまきしてよみし作してわつはけれにけり

西につはける

前々納言為氏

いかにしつゝ引くもみすわのけりうらみあるまき
ゆらとる女師花こいふしをよみはける

ま枯をよ草をよらまきとみか凡の書又にいれらし

隆信朝を仰ぐこと申ける日と云ふ
有しと云ふことありて
くじつと云ふことありて

後法皇も入道前國白を致され

いふはゆきと云ふことありて
物名

きのえ 雲祓ねん

う紫と云ふことありて
かのえ

上は乃若のえと云ふことありて
桶

唐申の如きと云ふことありて

伊勢人捕

何事もすじりか力ありて
じりこく

津も國助

嘗て先の一事をすじりて
すまのりか

隆信朝を

世にすじりて
いほ百と云ふことありて

皇々后と云ふことありて

なるもの事なることありて

あつて

入道前々大人

とて交りすといひたしきまらるるつゝ毛皮恨て袖うわきあつ

やせしや

丸人

同しちりら社やせしきしよりと社やせし社をさ交りあ

うしりて

前中納言定家

社よりいへりてし社堂のむらうしきし成りいへり

かゝりす

前大納言為成

居あつてまてかりすしと衣も程の苑りま城の系

すさか

入道前々大人

馬社よりまてまてめらたすこおしりてみぬ旗の面乳

あつて

丸人

いあつていへりていへりていへりていへりていへりて

みす

津も國助

逢しめりし命もつてまてまてまてまてまてまて

こゝろ

後頼朝

秘まてこゝろまて野成もつて世のいへりていへりて

いへり

山本入道前々大人

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまて

排踏哥

七月七日あつていへりていへりていへりていへり

さしあげられ

祐子の親王家化伊

春の日に因よに春と春日野のつらふをわし人のこと

歌一しす

大貳之信

秋の日向のよとと梅の花のたのしみとくしくと折つる物

柳並門前よりつる人を

信之信抄改

青柳のしらす花ををこましくやいにしはよまらさるる

百三十四番しす

入道前を改人信

えいあしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

二月の（あまのうら）以後は師にししすふかけれにし

しす

大僧正行尊

えいあしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

歌一しす

信實朝臣

あしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

大貳之信

あしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

よしす

あしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

并乳母

あしあまげよあれたる春の月のと夜の花ををこま

赤元百三十四巻一冊

兼人納言為世

よがくハ石の多成さういよと見ら枕も夜うらけら

歌一十

正二位知家

殿乃女のきちち我衣の娘わらとてくもさうくこらほは言

とにまは海~~~~ちかぶの紅雲のあはら

飛

康資之母

さし乃わらうとてわらける紅雲の錦もよら

物ける人の母もすつこすわらうとてわら

るけるよとてく~~~~ちかぶのあはらとてけ

後頼朝に

ちかぶハいかにわらうとてわらける紅雲の錦もよら

歌一十

正二位知家

ちかぶハいかにわらうとてわらける紅雲の錦もよら

返車車急こりしと

正二位知家

のましつらつらうらめし移うとてわらうとてわら

歌一十

女室の人

まよ~~~~あつあつわらうとてわらける紅雲の錦もよら

かしのまよとて人のまよとてわらける紅雲の錦もよら

和泉武部

いづけいづくにまゐりておまじかつこの世の人まゐる

歌

兼大納言為家

つら人の野ふにあつらゆみのかき吹よこす若くは

光後朝臣

世に捨て人まゐりておまじかつ今かくれぬのま

道周法師曰吉社の言をよよこすを後くゆ

けよとつとに因くいひつるけ

後查法師

あつらふまゐりておまじかつ今かくれぬのま

あつらふまゐり

續千載和詩集卷第八

羈旅歌

みら乃くうのむりけら人の餓けけら

檢中納言敦忠

ひつらゆしうらわらふとくがこいひかまうらふ
月あゆりけら人の汗よにりけら

小野小町

みら乃くう世成うと鳴うわらふしう用ゆらうらうらうら
人の國よけらよ 壬生忠見
とくれいどわ國とわ可わにうらうらうらわらうら

ものあゆりけら人のあゆりにりけら

貫之

紅雲花をとおれらんと可のよみれりうらうら
ものあゆりけら人のあゆりにりけら

惠慶法師

都きら人のこととわらうしと娘の月か思ひおれ
きこ所(あ)ゆりけら人あうらうらこの使も書
けしにりけら 藤原清心

あつらひくもてらか衣別の袖よは向きら
あ中(あ)ゆりけら人の汗よ病よけしにり

ける

中務

たるくもたをく我わわ〜ににむるんねまるんをり

天曆九年宇佐の使如餞ようへのまのここと

可よみけつよ

藤原高光

家の〜とつあ〜まはいま〜た〜た〜とをわやらかあ

源季廣下野きたにぬく〜下けつよに〜り

ける

刑部ヲ撰補

終りま〜今をわ〜じふたを〜とまは〜とわ〜とま〜

ぬ

源季廣

おたう〜今にな〜く〜え〜く〜終〜と〜ら〜ま〜(四)

別のんを

田島法師

か〜ま〜と〜ぬ〜ぬ〜を〜ま〜ら〜小〜命〜り〜〜わ〜つ〜を〜ま〜し〜

蓮生法師出家して後年未あひ〜と〜ひ〜て〜お

ける女親の〜し〜(こつ〜に〜る〜す〜し〜因〜申〜し〜

り〜ける

信生法師

〜と〜ら〜し〜た〜え〜も〜た〜と〜か〜た〜ぬ〜い〜ゆ〜す〜こ〜ま〜ら〜ん〜な〜〜と〜ぬ

ぬ

蓮生法師

今更〜つ〜る〜し〜何〜と〜思〜つ〜て〜我〜さ〜先〜ま〜家〜ら〜〜と〜し〜

周情守にぬく〜下ける人〜ら〜を〜け〜る〜す〜して

前人納言云に

梅弓引らぬとみすく小いさきしと男のけれを
梅弓の人の鏡をいひてよみかへ

馬田依

みちのれよりふるうみか新くましくまへてふと人馬の地

歌——寸

七片門地片製

朝身は後わらうこととけ舟のまへわがも神也——ルと

山階入道九人本

ゆく釣のはくましや梅人のつら野のまへに扇ら交車

前用白九人本 止集

浦くのまへにまういさくおしと甲破急をあらな舟

平宗宣朝長すめかける位吉社にやまう

に海路

前大納言考世

けこみかゆかめそかへる追凡の喚——こめ舟らことと舟

歌——寸

平氏村

らるつれら浪らうこていさく舟のけこみ寸妻こあ

よみ人——寸

照月をすしあくしう鳩けつと舟うまじ泊うと村

難波のこあこせら舟のうらうこけりかたも舟のこい

新院御製

かつとみか都やいひにわら京平の原路いさくとさうと舟
寸

百三言あり一付

後大納言定房

ちよあつて印入江よあしきいよくよわまは月を三光

棧の心その中を

津守国助

同うふ袖のひりしを便にく月とうさわの影や鏡

鏡堂へらうとかけのつるこいふ所よ日教を

けうよ思ひくきる

大江忠成朝臣女

秘芝しく幾度かる乃う〜凡を波の枕よ引くつとすし

歌〜ん

後京考賢

印しるよ〜いや他つる〜浪の枕よか〜う〜凡

夕泊こちゆを

前大納言通重

ちろ〜は波のまに〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

旅泊の心を〜とけりける

後二重院止書

ちよの浦よ〜印ちをすれあま妙の枕よ〜〜〜〜〜〜〜〜

赤先百三言あり一付棧

赤右大臣

母らひらう〜印の破巻浦人〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

田子の浦で

平舟時

棧人〜う〜わ〜を〜あ〜〜〜東海〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

波

歌——寸 後京の朝

かとうめしきいふうと榎敷うらつろれ袖うとらり

惟康親王実名未門督

榎うらと都へいづく道ちうらふりか袖うらうとらり

因路の客こいふまを

承寛は親王

ふい人の心にくのるふれやゆまゆとせぬの国ち

百三すきあり付 前右大臣

今もかたうやうね榎人の心むらとせぬ遠坂の国

前右大臣持統朝都よのふらとせゆけりわに

まへくさうとるうけり此にうけり

前大臣信正慈法

東海のくににあらうの国ぬふを都よすめとるゆき

如 前右大臣持統朝

都よふきにわの坂道けれぬとこの国にをさしけり

榎の言の中目 実信法師

ふいづつと嘆ちうとらうをうとらふとまきと逢人うと

歌——寸 了然上人

都をいとしつと山をいとしつと山をいとしつと山をいとしつと

藤原重政朝夫

都々くいん定は成り草枕はふりねのなをぬき

後京有る

りねごと今に思ひぬれぬくはれわら草枕を

後京考道朝長雨にまに休ける付又月五日雨

やめにうへくひりけ

前信公朝

極ぬは思ひぬれぬ草枕わらぬにふりねはいつ

考道朝長

つようめ乃のやまらうへ草枕にふりねのふりね

平宗直

年ふれぬ極の極極極極極極極極極極極極極極極

極宿是らいつ

平貞付朝長

夏しふ極の極草枕をふりねの極にゆりふ

ふくまふめしと休ける位者社ヤララ

日極宿風 前大納言考氏

夏をよまにひりぬれぬ波はらるるのよふよめ極

名所奇ふみ休けりよ真野入江

源親也朝長

極々つようめ乃のやまらうへ草枕にふりねのふりね

椽のくそ

中務卿宗尊親王

藤枕いく野のまにじしとひこね二束りうらな家の娘つを
野中の一水とさゆうく

平井時

とくそ野中の清水のをみくもきすみ別くうは

歌一十

法京四位

かふ門かろ海の家のおれ衣がさきくく野のうらな

修りいけけらるうく月好のいさしりもを人

み預^{うらな}到^く

よみ人一十

今まこけふ契とわこよの思いとくく道まぬじゆ

歌一十

藤原重敏

ゆらうらなと三れす草枕しとゆらうらなをま

百^{うらな}言^くせり付

入道藤原重敏

椽らとかくしる神の家付るきのふとがまをくそ

弘妻百言^くせり付

うらな道のけいんくくまよまをまききの鳴^{うらな}い

歌一十

永福門院

椽らとめいりら神の泪あく結ん枕と野をさる夕な

言^くにらわしと庭よまをまききの入わいの鐘

長谷寺より室^ま戸^ま（まうくけけらるま

日暮く鐘の夢因しゆけれい

法下道我

今夕く夕ちくく我くしにむし松葉の具か入道の子

梅の心を

田光院入道兼用白を収大長

書ししつ星のししつららるわに我しとまふ宿やるは

権入信都成瑜 漢人不知

いづくもさうこめ梅のめくろく星をうらむに宿やこほ

ほご後宣子

なむく宿より夜いりましと星のそらの野へまふ夕暮

百三十一

前用白大長 押上落

りさうをしく夜いりつのも成よりやう日影は

歌 三言法師

ゆい夜々ちくくつららるわに我くまふてむら月影

純粋文朝長

りさうをしくのつららるわに我くまふてむら月影

大江宗秀

天津をゆき雪をたすじ月のちしつ梅のさひりるを

惟宗忠景

草枕家のやこふ月をまふとわめいぬの御ゆるは

百三十二

後三后宣子

月と又去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを
月前思をうとこいふをよりのとほうけり

土岐門流と製

去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

檢の心を 世義門流

去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

源兼氏朝長

去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

蘇赤漢雅孝も月の比誰波もくくうとては

けりよ便よにけり申にけり

丹波忠盛朝長

月と又去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

蘇赤漢雅孝

月と又去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

蘇赤漢雅孝も月の比誰波もくくうとては

藤原清忠朝長

月と又去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

蘇赤漢雅孝も月の比誰波もくくうとては

觀意法師

月と又去る己のまをうと我斗やうらと思ふ野へのみを

乞

前中納言定家

都らへ書つらむに思ひてのいへりていへり

夏秋奉行朝臣

曉乃用曉乃の故きつとまきめくみさくしにわらわりの

わにりへらつとけり道すくもみ付け

祝部成茂

清みつ浪の用ちさうしと月をみ捨て流るる

曉様にて

惟宗亮吉

よきさへくし流さくわ有次の月より後の友やうし

乞

中京師負朝臣

極人の床よりと爰始くゆくゆくのころ有次の月

賀茂宗久

告りらうしにわらわりの枕にさしと床のし

洞院持政家百さうの様

藤原門地女

かゝるしにわらわりの老いよいゆくあうきよは

は世百さうしをりける付

前中納言為氏

月ゆく様さくゆりし夕やに道くしし流るの中ら

乞

平範貞

世に〜〜〜〜〜ひつり〜〜〜わが世に〜〜
赤元百三言あり〜時様

前入納言有房

言の糸も及いぬ布のさよ小都の人よいつか〜

詠

津守國道

と甲〜〜あ〜〜まのよ乃幸ぬも煙を人よ〜

入江廣房

ひま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

源邦也朝臣

娘凡い思ふ〜〜〜と吹う〜〜〜都立〜〜〜河乃國

赤元百三言あり〜時様

贈後之信為子

新人とえ〜〜〜〜〜吹ぬ〜〜〜の用は〜〜〜

雪中懐め〜〜〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜

今と脚製

雪乃〜〜〜に〜〜〜〜〜道〜〜〜は〜〜〜

後赤松格久家多〜〜〜言合〜〜〜用為雪朝

前中納言定家

雪の〜〜〜^{コト}〜〜〜の用や板〜〜〜〜〜月と光〜〜〜

入江於重あり〜〜〜と〜〜〜申に〜〜〜

法眼慶祐

なごころにまごころをばりしこそよきまごころの香はまご

ぬり

人江頼重

都ごにいられぬ時よ思ひや我越法言の慶なりをまご

ぬり

法眼徳因

うら田つけこそむねを極人の夢よまごころ雪は清け

兼惠法行

ちとつくらばより外極人のかよふこそなる路の白雪

わによふくらこそよふけりよ年の言にゆりの

ちとつくらばより

祝部成茂

別きしは年こそ友にこそと涙りあやまよふらふゆ

前大納言為成わにふくらこそよふけりよの

ゆけり付申にくりけり

源義行

ゆき乃極の愛日みよき思ひをくれぬらうとを

ぬり

前大納言為成

ふるさに思ひをくれぬこそ極福の夢にみよれま

ぬり

前中納言為相

まごの愛乃こそいちこそよのほを極のまごこそ

前大納言行健

差をこにしんひともそ子草枕より秘座のよの光り

古所門枕の巻

あつ乃枕いふと別れはほむろつと松のわらじよ

家百そ奇中様 後京松栲以前を以大に

あつ乃かふも寝たもさあふ一宵の言成松よきうとを

百そ奇中これにわかすよ。

は皇止巻

あつけらら百をさつこに我こよんりつうの寝所小

様のんをよると好うける。

あつそつ家海こつとあおじつこをうてけ世を

様ご思入を

續千載和歌集卷第九

神祇歌秋

建武八年位江子御幸ゆく行儀述懐こゝ
中を誦とくはけりよとと結けり

後醍醐天皇御製

治承元秋世にうへ位吉志松もよと也をよもく
右幸位御為御

幾世も又ゆく妻を松をくく結しゆら位吉志松
麻右兵衛督為御

位の江子三書の止幸を結松とく秋もよと也の程満位

位武八年位江子止幸ゆくゆへんを誦とく
依けりつて山本入道麻右大臣

位吉乃松ゆきとよ切とすくくゆへんを誦とく
位吉の秋之國平人官位止幸教ゆして松。
枝さきのけり依けりをみく女房よかゆと
常盤井入道麻右大臣

ゆ年にも初らよるのよを誦とくゆへんを誦とく
位吉祐を誦とくわぬりき秋祇祝こゝとを
ゆへんを誦とく

位中納言為御

後吉の松と花うらやみはわひしてつとち我おしほのち
今祐よさうらひして面をわらさしよ免ら

津守行國

うらわに淺澤まの三我休三我もそつといくくわん

江上月と

身々后之入夫後成

思ひ出し秋代とみこや夫系えと武にの後の江と月

歌しす

よみ人しす文智は師

まわさし秋代思ひこころもわひの亮い年ちわわ

津守國廣

契わつとにふる秋のちまの煙を成線けりて力を執る

玉津嶋の面しすよみかける

前大納言為家

みこころに法を思ひ玉津嶋今とわにじり走をくも

源兼氏朝臣すめかける玉津嶋祐十又三郎

よ前大納言為氏

あしゆやよりし言は笑つて世まうをうら秋の末と執り

歌しす

前大納言為氏

つこの浦やまもうにわれと今志をうへて秋うみく

津守國助

こつ乃浦に思ひ相言は交ねいく世ももれ志うらわのち

入道麻を政人長家すゑさうすは懐
一寸らほうごせといふはるの節 和は向くとわ我力やとん
しるは 春日社ふまけるう中よ

麻中納言為氏

埋木の力いづくに〜ありやと和こよ春あかく三郎とと
麻用白を政人長春日社。雨〜〜休けり。上階
よの別あ〜〜代々乃治よかり〜〜と執事か
て是いに〜をゆるり 麻中納言為氏
みろこをよと今いた嘆〜〜と考よわしわ

歌〜〜寸

麻中納言雅春

三途の春のわくみはわ〜〜後のま葉と信やう〜

嘉元百三言あり〜寸

一葉の人長

〜〜を信ら〜〜乃朝日乳わ〜〜と〜〜あやす
あはは師人〜〜す〜〜百三言あり〜寸

麻中納言山家

中〜〜〜〜〜三途の思ふ〜〜林花〜〜
氷五月の春春日社。こ〜〜は葉〜〜
うの中に 常盤井入道麻を政人長

春日の思〜〜の〜〜交草の茂〜〜み〜〜力よ候わ

秋萩の心をよるとほけり

後二葉流石歌

今よりわが秋を思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

前中納言定賢

のひらくさねを推し春日の上りてあのをとくくく年月

歌一十

中尾祐茂

春日の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

前信正實聰

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

後京極権近藤を改人氏

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

若宮秋葉に成く後よ免ら

中尾祐春

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

歌一十

柏秀房

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

狩人伝都乙順

秋葉の上りてあのを思ふ春日の上りてあのをとくくく年月

歌——子

麻人信心弾助

今も移わぬをけりくみく田中や昔の泣き声と云れ

は身片断

いふらりちるのひもわぬ枝のうらひのわら

二匹は親と家と云うも枝雪

権人納言行徳

冬も我の痛の枝し——林さしく枝より雪はまじり

は身百も云うもけりけり

入道兼左衛門

雪も我の痛の枝し——ゆふひききう林のまじりみん

光明寺も入道兼左衛門の長子かけ。付家にも

三つうみかけり

辰二位家隆

ちりやう林の市室もまじり鏡もまじり世の乳と云れ

歌——子

は性も入道兼用白を故人

林垣やみじらの乃り——寸さうらうらうのまじり

みわれの口を——に枝とかけり人の好み

祐子内親と家記傳

ちりやう林の市室もまじり鏡もまじり世の乳と云れ

由金と云うも前入納言賢喜のまじり

にりしして

辰之位氏久

志のしつゝをともわ子固ありし我神よのねり〜の夢

也

麻人納言資季

いよ世つちを〜つわ〜しよら〜らうひれよのねり〜ゆふ

林祇を

権信正桓也

是しち〜つちせよそちら〜やら神よののねり〜

麻人信正に澄

志ち〜ら神よののねり〜く〜わと世を〜

日吉社よ〜み〜ちりけら百三三

麻人信正慈鎮

つ〜し〜學日吉をねじ〜く〜し〜し〜

神恩のゆ〜し〜を思〜

信眼兼奉

儀〜〜わ〜〜み〜とつ〜ね後の世の周〜日よ〜の

床堂の後社歌〜〜よみゆけら

天名信正慈勝

志れ〜を思〜い〜ま〜よ〜み〜月〜の〜

百三三言為世 麻人納言為世

志ち〜ら七の社め〜く〜み〜う〜つ〜七甲の力よ〜

歌〜〜子 祝部め成

いしは秋の歩舞を引くを一柱で今のこころはね

法眼慶宗

みちのねをとりけし秋はみちまはしくねの白ひり

後を法用白前名大長

くろく世成まにけりし秋のめくみは西のりき

百三十一時 前用白大長 押上後

大地乃を初ける秋代りくねねにさあまうはこ

宗國祝こころんをよくとけうけり

法皇止教

くろくね連日如事にあたるわ大のこころの國うわの國

百三十一時

我國は内かみまに秋代りくねにさあまうはこ

宗元百三十一時

前名大長

みちのねの秋の心をわくくみまうは流りぬ

何月こころんを 法見止教

いすはくわるの秋のうきと秋代りくねにさあまうは

惠助は親

すじ月如事をうけりしすはくわるの秋のうきと秋代りくねに

左秋代りくねにさあまうは

は下寂信

すくりにききしじつに秋代風入今よりふあまの月を

秋——子

度會外也

すくりにききしじつに秋代風入今よりふあまの月を

是本回也

秋代風入今よりふあまの月を

伊勢園に——所依けるを人よさうにけし

よりうらふ申依けるをいふくまゆりも依る

み氏部々資宣の——申にけし

は眼源集

伊也の海々今も天照神凡ゆるわら浪ゆる人をうた

秋——子

人江貞重

秋——子 人江貞重

る清水の臨時冬を

前人納言師重

る清水の臨時冬を

秋祇の心を

後二条院抄製

秋祇の心を

百三言やこれにがえり

は皇御製

世に思ふつゝしとておれを清らきまきまにあらせしめ

貞元二年伏見院に中納言あり付大納言

兼大納言為世

更なるの御方にしとておれを清らきまきまにあらせしめ

文治六年女所入の屏凡も内侍所付大納言

式部卿

兼中納言定家

元来して御に御海を明らにわつ星をうらみおれを

天に元年鳥羽院の御付大納言會徳地方大納言

兼中納言定家

兼中納言定家

よりおれを清らきまきまにあらせしめ

康治元年を徳院の御付大納言會徳地方大納言

兼中納言定家

おれを清らきまきまにあらせしめ

延喜二年新院の御付大納言會徳地方大納言

兼中納言定家

久世の天皇の御付の御付の御付の御付の御付の御付

出ら月りか

音に松竹のいゝ松うぬゆるの月をくくりにかきつらうとに

妙観定智の心を 法下守禪

茅修くくもくわ西のよむとよく風も清く月の氣も

然此自證之善抱出一切地を

前入信正之證

この月乃ちわたさくとお世の度も身もまうくして也

大日經成就悉地品云垢妙清淨同鏡常現

前 了然上人

是もくみへ今をくくわらふよみくくくみぢりあを

鳥羽池片叶あきゆの鏡をほて奏くゆる

寛鏡上人

田子鏡うにこそすらす安をいほくしよ世の体こころを

片叶 鳥羽池片葉

そちんく清きりけよちりやい鏡のをにふくころをこれ

真言池のたをくらえく

法皇片葉

この世ににおよすじつと理いちくも極のたうらまけけ

片叶 前入信正禪助

えいの世にちるもちるやもたき花のなをいさうみらさ

有え不二ゆを 法下通我

しるしとあつしとあり今更なるははるけれを
法華經序に照平東方と

入道親王の言

春のくらくを照しはの花むくつをせしをとり

我見燈明佛本光瑞如斯

源有長朝臣

昔や春の云り乃るぬい今も此法のむるさく

方便に漸く積功德

法眼親證

墨染の袖もゆりくうにをうたけり花の白ひ

母の月忌は法華經をみりて書て巻くゆを

よみく表紙の繪よりとよけるよ二の巻くを

んを

兼中納言定家

お甲とく切りのとじ花の陰も思ひの志る古御

譬喩に

を懐此止翫

つらみの車にのをけり思ひの家をりしこわりをり

信解に譬喩如童子幼雅^稚無識の心を

法下定考

とくそくうじりしをけりををるのりしをふりし徳の撰

法華草喩に

信都源信

一付にうきこころのうらひにけりて草子も校うらふと

修賢門下中納言人々すすめかへは花經廿八和

言りりとよけけりて校記不於末末世感得成伴

の心をよみかへる 皇太后宮人史後成

いっ斗挽しりもえしうらへかたし世の半いさし向引を

女史行不深入禪定見十方佛

志門のける座をてし入也我にころあしねえをうみ

涌出不後地而涌出

比水の座より出らむら子葉のいそにうたしき事如え

身をも不他を友已復至化園

麻丸無由皆惟方

旁やうと娘ゆわしの又中にししの葉のとうあつとけり

方便現温繁印實不減度

権大信都隆嗣

あつしうの巻をとかくと惣おしきもの月い今とすしや

勧教品の心を は不減運

み世人のゆええやわりのと機うらへにけりむねとてん

諸行無常是生滅法こころを

前大納言為家

きりりわ世よあかきい流やしやけりまの推し雪の山

仁日仰觀之不見其下
みかけの付郭を因て

旅人信正忠源

きつねのむらさき
この世の時多うくは
留りの初言くふ

多即是之の心を 瞻西上人

くゆとるる月をうけ
しすし床の文も
えりそり
まけ

不妄語戒をう先る

旅人信都教教

草の葉の房とむら
りのわけりして
到しむくは
いりてむら

草葉比丘を

旅人信都頼録

草の葉をいりり
人のほいて
こころも
房の力と信

唯識論智と真如平等の心を

旅人信正良信

電燈をえとむら
りともみ
つ子に
よす
ら
娘のよ
月

心清淨故有情清淨

覚懐法師

いぢりぢり
まじりの
心よ
ゆき
うの
ま
人の
水
は
清
く
ま
ら
る

未得真恒を愛中

法下實壽

晴るる
ねの
こころ
ほ
く
あ
ら
ま
し
み
ら
る
ま
ま
ら
る

月既母覚知一人
して死永壽
こころまを

うしんぐんしんじしんぎん 法名不詳 せんぎん 法名不詳

後法性寺入道兼用白本利壽のいかにん

母十如乞のうらりととゆけりよ如乞カ

兼中納言山家

かみれきん志原に浪ちりてゆゆすのりうらら

又百才子不 九条大末女

そらつちるんうらうらつ神よりけるる成国いみれ

法名不詳

ゆいひく玉ゆくまわらね方成之極のうすく後

勸持不 西村法師

いふく恨し袖もやみきしおろくくやし有明の月

壽量不 道基法師

伊のへふからうす今と等すわらねるこの月を志し

檀律師澄世

まの世にうらしてうら三月ぬすの月を雲かくれ

妙音不 兼中納言定賢

かひくくわちるにみり安う人をきくさね誓ふゆれ

後法性寺入道兼用白名大良もゆける付家に

百三うらうらゆけるに釋友のんを

刑部マ損補

わひつゝほのうゝをえらるる方若し海は何の所ぞ
吾門に種々諸悪執

源兼成朝臣

汝も又いりたる道に由らふも契一印の志も入らるれ
言語道断人行所滅といふを

兼成僧正忠源

今向て向つゝるうあけらるる乃ちかくを為さぬにめく
性助は親とかくれく（徳）の比は眼形辨はむ抄を
つゝて信養とさせけらる

兼成僧正性助

こころけりし寸先も思ふくもあははのたはさう開け
兼成納言為家乃向りて後一めくつた兼成
納言為氏如法行書付けらる（ま）持物とくは信
らる

長三任氏久

じうとあははの先はあしは圓うへくくさる子し
一品絶を書写しよとくくくくく付けらる

の中よ

皇太后官人兼成

程内さしん志水一月すみくむけりすし胸の道
思順上人願を忘れく向りてあははける後（ま）
らる

後成兼成氏

ゆきしる麻とこころをさしめ月を月と月とわらふ
主号と寿経易は向きの人の心を

西行法師

西の月をさしめ麻に身をしるは月を月とわらふ

備如浄水洗除塵身方

蘇人納言為氏

を乃にさしめ麻とちりしるは月を月とわらふ

親を告経と宮會の心を

田丸ほりと人

春やさしめ麻とこころをさしめ麻とこころをさしめ

日想観照常専心教念一念

照空上人

夕にさし入江の岸のすしめ麻とちりしるは月を月とわらふ

後鳥羽院下野すしめ麻とちりしるは月を月とわらふ

みち親を

蘇人納言為家

うしほくすしめ麻とちりしるは月を月とわらふ

光明遍照十方世界こころを

源之上人

月影のすしめ麻とちりしるは月を月とわらふ

下品下生の心をよみゆける

蓮生法師

石ころくつが花果ころなつお月いぬにおえ様うすは

佛用末始知方便之思思を

順空上人

重くみくさし江の上橋よりいふ今うむくまをわ

阿ふ後徑常非天樂の心を

後新納氏

苗ゆもに双の志くくぬがうらぬぬしむはやく

はと論永教身心悟

くるくもりしことおん思ひりみくまぬのんちり

法不覺覚説法にかけらる銀まくちらす

乃其成りくつくく氷橋の念珠をまてにん

しけり

前住信正成賢

極樂のちらすやうく玉をまつ力ぬれ思ひま

ぬ

法不覺覚

さしつらくんぶ玉のまらまうせのつと思ひま

真言の教相ぬにぬ因て後詞いせしよる

んりしやうさゆまへかけ人のぬすよ

麻人信正道實

涼くも思ひまうはの休うぬましに波ににん

麻人信正ら澄谷川のとりひし流こよみくは
ける事を信正のいかに思ひぬく

信正桓守

あふま乃東うほこ若川のありれ末にこころは
代々の江州及いころまをゆくよきはけ

信正都澄後

あのはらのとやのこすあふい言笑むむのまうすく
田宗まのは花會おこしをいかにけけるよはり
て雪のいぬくちかけけ

信正師定海

思ひこや庭の雪をこもて後めらるの江りきこえ
歌〜〜ん

麻人信正禅助

思ひよかこし代々のほは道をつらけらる方よに
百もすうめこれにけりよ

信正此歌

ぬにぬりかごのいしをうきこはは信正一宿いよめけれ
あえ百もすうめこれにけりよ

麻人信正通一

つらきよめやとこ〜〜ひもあ〜〜の女をよき
久世百もすうめこれにけりよ

徳賢門院堀川

ちよとてはゆよふとりのよの書はつて月のみふをみかゆりふ

釋教三つ

は務る給

甲ふんごう勝のうつとを教くもん乃月をまのじりやう

人のは又あふけけらぬ

は平成運

有明りもとみかへをぬ月うととまうとらうやえうとつと成れ

歌一十寸

は之は宣子

いさや江の水のふとまふんごとやえれら月ぬ氣かくもは

身后言

照けら光とまうの氣あへてしやし月の都やゆら

山幸相典依

田よりくも勝とわらへるまふんごぬぬ月の星ををれを

詠天門院

と方にいふはのなわら世中よ又まうとつと甲くりやとら

前大僧正親源

めくつとわらぬつとらうれとらけははの車は江後おせに

日吉村よせりけら百と三つ

前大僧正慈鑑

らぬくもはまふんごら有物をまへらうとらうよ人の思は

百々奇めくや一にがてよ

はるけき

久く乃をよ月りのめくろこうゆだいな聖す初や公れ
春日社よりく淡はけ

亦人信正乾画

やうくろえをみくと春のりぬくもわすしのくしを
く

亦人信正良信

わくしけいしはよわくらのひもくしめいのくしはゆい
水福門院

くちあくゆい初けるも束の差をきくくくくくく

はる百々奇めくや一にがてよ

入道亦去政大良

尋入るこ今とこのかめゆよふをさうこくく人のあこ

釋教のんを

承覚は親と

ゆいんをいぬつそくくくくく初て実ひるのこくくく

亦人信正禅助

くくくく通せん乃くくくくくくくくくくくくく

はるけき

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

亦人信正奇めくや一にがてよ

民に實教

世成て予先づ人をすつひと我をよんてははるのこも

く

亦人信正忠源

かけそくは乃とも久後の世はちとみらのちるを我

亦人信正範憲

いづかてつらうらふことす我は信をこすははる燈

信正寛田

信正ははるのこも久のちるをいづかてつらうらふ

弘安元年百三十四年ちりける所

入道三不親之性助

きく世成てははるのこも久のちるをいづかてつらうらふ

正和二年は身高野山より幸か一内代とのた

あててそのむら興にもめされつら信正もまた

いにをゆける 信正の順

も野のみゆるとははるのこも久のちるをいづかてつらうらふ

いづかてつらうらふ折ふの申にりける

寛政上人母

きく世成てははるのこも久のちるをいづかてつらうらふ

是後上人

のつらにちる人きく世成てははるのこも久のちるをいづかてつらうらふ

心なき乃とをせく洋ちの門よ入付けの比月をみ

漸空上人

こゝろにうらみあしひのちきりくはまはさうく娘のよの月

歌——子 歌え上人

このまゝも入月歌も去るにけりあにんをうけあ力をうそ

ま運の粧まゆみで思ひくよみかけ

如也上人

こゝろにうらみあしひのちきりくはまはさうく娘のよの月

歌——子 律師永観

世に捨てわらうと海をわたる方こそうと思ふう娘のわけ

千観法師

松葉のふはれちりていよとくも飛べまらざる人ともわづらひ

百も言なりし時 入道前を改大臣

世乃中成とくし待みかや高の朝よりうあ後なり

堀河の丸人良雲居もに西くくうよみか

けつに 菅原を良納良

しんこゝろにうらみあしひのちきりくはまはさうく娘のよの月

も野の倉室ぬまへみあむの候くらすをみ

二おは親と賞法

あはもつりゆにそのまをれんよりけつんふとあはに

覚れは親と歎きを世雲々のまぢりうのん
を奇にししきさうしにうりてはけり後
けり 甚後

ししき乃書ののちりるしよの月かきさし

ぬり 入道二親と覚れ

ししき乃書のの月かきさし
ぬり 亦人信正るま
ししき乃書のの月かきさし
ぬり 亦人信正るま
ぬり 亦人信正るま

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, located on the right side of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the middle-right section of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the middle section of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the middle-left section of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the middle section of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the middle-left section of the page.

Handwritten text in a cursive script, located at the bottom of the page.

